

『それはさうね』

女は考へるやうな眼付をして下唇を嚙んだ。

『それはさうだわ』すぐ繰返して、『貴郎だつて、ぢき飽きて了ふわねえ。……男はそれだから頼りにならない！』

『いや、そういふ譯ぢやない』

『いゝえ、さうよ。男ッて言ふものは皆なさうよ』

『そんなことはない。女に言はせると男が身を投出して來なければ、頼りにならないといふやうな氣がするかも知れないけれど、それはとても出來ないことだからねえ。女が出來ないと同じやうに男にも出來ないことだからねえ』

『女は出來てよ』

『女には平氣でさう言はれるけれど、男には出來ない。出來ないのがよく分つて居て、出來るとは男には言へないからねえ。』

『矢張情が薄いんだわ』

男は黙つて居た。

八月の末にはもう山には秋が立つて居た。朝晩は山の空氣が肌冷々とした。二人はもう都に歸る準備に取懸つて居た。昨日、東京から電話がかつて來たので、降り頻る雨を紺蛇の目の傘に衝いて出懸けて行つたが、其處から歸つて來た女は、もうちやんと山を下ることに心を決めて居た。『貴郎も一緒に歸るわねえ……私一人で歸るのはさびしいから』など、甘へるやうな調子で言つた。



山に來た時のことが新たにかれの頭に繰返された。容易に別れられない二人の間柄を考へてかれは黯然とした。

## 十九

二人が山を下りた日はよく晴れて居た。深い谷底に聞える水の音は段々近くなつて、絶壁に臨んでゐる茶屋からは兩方から落合つて流れて行く谷川がそれと明かに指さされた。白い雲が流るゝやうに連なる山の上に靡いた。

二臺の車は、草鞋の下げられた家の傍を通つたり、高く架つた吊橋の上を輾つたり、泡立つ谷川の縁を走つて行つたりした。麓にある瀟洒な一軒の茶屋の二階からは、林を透した水の音が淙々として聞えて來た。

白金巾をかけた卓の上には、野から採つて來た花が大きい青



磁の花瓶に一杯になつてさゝれてあつた。女は疲れた様に椅子に腰をかけてゐたが、やがて其處にかけてある長い鏡の前に立つて立つた。

機嫌の好い時でなくては見られないやうな明るい顔がそれに映つて見えた。

『東京に歸つてもつまらないから、何處かもう少し遊んで行かうかな』

こんなことを男が言ふと、

『まだあんなことを言つてるのね』

かう言つて女はその傍に来て腰をかけた。男の沈んだ顔付をして居るのに比べて女は何處となく生々として居た。女の

心は明るい灯や賑やかな町の方に行つて居た。

男の頭には種々なことが往來した。かれは依然として元のまゝのかれであつた。二ヶ月以上の月日、それがかれの身の上、何の變化をも齎しては來なかつた。賑やかな町を背景にした女をかれは矢張頭に描いて居た。『また多くの男の中にこの女を見なくつてはならないのだ』氣が附くと、かれはこんなことを考へて居た。

谷に沿つて、山は段々開けて行つた。崖の下のやうな處をも通つて行つた。遊覧の客は草鞋をつけたり車に乗つたり駕籠に揺られたりして遣つて來た。路は俄かに林の中に入つて行つた。其處にある電車の發着所の前には、幾臺ともなく並べて



置かれた車が、一時間毎に到着する電車からの客を待つて居た。待合室の一方は茶店になつて居た。二人は其處で電車の来るのを久しい間待つた。

新に開かれた電車は、新建の家屋の多い新開地のやうな處を通つたり、大きな観音の堂宇の見える處を通つたりして、次第に山を離れて行つた。

大きな谷川に架けた鐵橋の上からは、潤い高原が展けて見られた。空は碧く高かつた。野原には蟋蟀が鳴いて居た。

橋を渡つた處の停留場では、電車が兩方から摩れ違ふ様に出來て居た。長く待つてゐる間男は車を下りて、其處等を彼方此方と歩いて居たが、終には待たなければ、傍にある葦洲を張つた

201

小さな茶店に入つて行た。ちよろちよると、篋の落ちる綺麗な水の中には、心太が旨さうに浸けてあつた。女もやがて下りて來た。「何うしたんでせう？ 遅いのねえ」かう言つて眉を盛めながら、矢張男の傍に來て腰をかけた。店で爺と話して居た近所の者らしい男は、ちろくと絶えず二人の方を見て居た。長いレールに晴れた日が照つた。



これで東京に歸つて了ふのは飽氣ない、何處か一晚途中で泊つて行かう。かう男が言出した。しかし女はそれに應じなかつた。久しく留守にした東京のことが氣に懸るから、何うしても今日は歸ると言つた。男はまた男で、昨日東京から女の許に懸つて來た電話に疑惑を抱いて居た。その電話を聞いて歸つて來てから、女の状態が急に生々した調子を帯び出した。東京に歸るのが何處となく嬉しうに見えた。

『貴郎も随分解らないのね』男の疑惑に對して女は二三度もかう言つて笑つた。『私はそんなんぢやないのよ』

町の停車場前の茶店で一時間ほど汽車を待つて居る間、男はつまらなうな佗しうな顔をして居た。歡樂の後の悲哀が、犇々とその身の周圍に押寄せて來るといふやうに頻りに手酌で盃を明けてゐた。やがて手を鳴して女中を呼んで、銚子の代りを命ずると。

『貴郎、まだあがるの』

「……………」

男は黙つて居た。

後には女も顔を曇らせて了つた。女中の持つて來た酒の酌をしてやらうともしなかつた。男ばかり獨りでグイグイ飲んでゐた。



女はそれを見て居たが、やがて、

『私にも頂戴!』

かう言つて、盃を取つて、矢張手酌で、二三杯ついで飲んで。

男の顔は赤く濁つた佻しさらな色を帯びて来た。女の顔は

蒼かつた。

『何うしても歸る?』

『え、』

女の答はキツパリしてゐた。

また二人は黙つて了つた。

女中が切符を買ふ爲めに其處に入つて来た時には二本目の徳利がもう空になつて居た。

『貴郎、何方まで?』女はキツとした顔で男の方を見て、『矢張、上野で好いの?』

『僕は何處でも好い』

『何處でも好いつて、それぢや困るわ。何處か途中で遊んで入らつしやるなら、さうして入らつしやいな』

『いや、遊んで行かんでも好い』

『ぢア、矢張上野で好いのね』

男は黙つて點頭いて見せた。

女は自分の財布から五圓紙幣を一枚出して、『ぢや、二等の上野を二枚買つて来て下さいね』かう言つて女中に渡した。

女中が切符を買つたり、荷物をナツキに代へたりして来る間、



二人は矢張黙つて相對して坐つて居た。「もうお準備をなすつても宜しう御座いますから」かう女中が其處に来て言ふ時分になつても、矢張口を噤んで何も言はなかつた。二人は黙つて勘定をすませて其處を出た。

停車場では殆ど待つ間もなかつた。人々は改札口からもうぞろぞろとプラットホームに押寄せて行つてゐた。二人の入つた二等室には、西洋人の夫婦だの、切下げの上品のお婆さんだの、官吏らしい髭の生えた男だのが乗つて居た。二人は筋違に腰をかけた。

町を掠めたり野を横ぎつたりして汽車は動いて行つた。二人は矢張黙つたまゝ一言をも交さなかつた。二人の胸には種

々のことが往來した。

『己はこれほど思つて居る……』かう思つた男は、自分の胸をつかみ出して、そのまゝ女に見せてやりたかつた。女はこれまでに別れて来た多くの男のことを考へて居た。

ある停車場では、薪が一杯に積み重ねられてあつた。ある停車場では、大きな時計の針が間違つた時を指し示して居た。綺麗な水は處々に小さい瀬をつくつて流れた。

女も段々酔が發して來たらしかつた。赤い顔をして體を持餘したやうにして居た。下駄を脱いで腰掛の上に坐つたりなどした。後には向ふむきになつて、前髪を窓の下に當てた。袂

袂けてでも居るかのやうに髪が揺いた。



男は久しい間大きく出た帯の松の模様と行儀わるく坐つた白足袋の裏とを眼にしなから、この一箇の小さい體の自己に及ぼす關係を考へてじつとして居た。

暫くして再び此方に向いた女の眼には、歴々と涙の痕が認められた。しかしまだ心が解けないと言つたやうに、女は絶えず男の眼を避けて居た。ある停車場で隣の客が二人下りると、其儘上の網から信玄袋を下して、空氣枕をふくらませて、體を小さくして横になつた。矢張向ふむきになつて居た。

をり／＼長大息を吐くのが帯の上の顫動に見えた。

男は無益の考から離れやうとして、幾度か努力した。しかしそれはいつも徒勞に歸した。窓の方を向いて、移り變る景色を

見ても、何の甲斐がなかつた。二人の不機嫌は矢張二人の不機嫌であり、二人の苦悶は矢張二人の苦悶であつた。

線路の交叉してゐる停車場では、旅客がドヤドヤと入つて來た。もう女は横になつて居ることが出来なかつた。急に起き上つた女は、兩方から壓迫せられるやうに、小さくなつて腰をかけるなればならなかつた。

もう二人は全く酔から醒めて居た。搔上げても搔上げて、女の鬢の毛は蒼い頬に垂れて來た。男は眞面目な難かしさうな顔をして、常に一處を見詰て居た。

男の隣に紋附の羽織を著た一人の紳士が乗つてゐた。それがある賑やかな停車場で下りた。暫くすると女はもう堪らな



くなつたといふやうに、いきなり男の傍に遣つて来た。そして下駄を脱いで、膝を摺付けるやうにして其處に坐つた。

「何處かで下りて遊んで行きませうか」  
 から小聲で言つた女の顔には、やさしい笑が湛えられてあつた。

「何うでも好い。歸つても好いよ、僕は」

「遊んで行きませうよ、ね？」

「でも……」切符を買つたからと男が言はうとすると、

「好いわ、切符なんか無駄になつたッて。ね？ 遊んで行きませうね？」

「かう言つて『這麼風にして別れるのは、私、いや』

『でも無理にさうしなくつても好いよ』

「好いのよ」

汽車はをりからの大河の鐵橋を轟々と音を立て、駛つて居た。



## 二十一

一緒に居た時の満足離れなければならぬ不満足、それが縫れ合つて、しつこく男の心に食ひ入つて居た。「先程、貴郎は怒つて居らしつてね」氣が附くと、女は笑を顔に湛え乍ら男の方を見て居た。

それは池に臨んだかけ離れた六疊の間であつた。二人は停車場から車で其處に遣つて來た。暗い杉並木の奥に古い名高い社があつて、綺麗な芝生の上には、大きな石碑などが立つて居た。その奥の家では、銀杏返に結つた意氣な女中が出て迎へた。

「お前も怒つて居たぢやないか」

「だって、餘りですもの」

「男の心は女には矢張解ないんだねえ」

女はそれに答へやうとばせず、

「貴郎と一緒にになると、屹度あゝして酷められるのね？」

男は長い汽車の間の佗しい沈黙を思出さずには居られなかつた。其の時の心の暗闘——夫れは丁度警敵のやうな心持であつた。

寧ろそれ以上であつた。向むきになつて身を横へた女の小さい體を見た時には、かうまでに此身を自由にする悪魔をすだすだに斫りさいなんで遣りたいとまで思つた。何うとも勝手に



しろ、もう二度と口も利かない。かうも思つた。かと思ふと今度は、此儘別れては腹が醫えない、一度は此方から甘い言葉で女を引張つて置いて、いざと言ふ時に、ウンと外して前に踏らせて呉れなければ男の意地が立たない。こんな事をも頭に描いて見た。併し女が自分の傍に寄つて来て坐つた時には、さうした種々の考はすぐ消えて了つて、抑へられない歡喜が胸に溢れた。其處では、二人の物語をまたげる何物もなかつた。電鈴を押さなければ、女中は決して其處に遣つて來なかつた。もう夜になつてからかなり時間が経つた。あたりはしんとして居た。池には母屋の電燈がチラチラと綺麗に映つて居た。石の燈籠には灯が入れてあつた。虫の聲は雨のやうに其處にも此處

にも聞えた。

「明日からもうお前は僕一人の自由にならない體になるんだねえ」

「もうそんなこと言はないで頂戴よ」

かうした會話もをり／＼聞かれた。

「心？ 心だつて、分けられないことはないぢやないか。女の

心は幾つにでも分けられるぢやないか」

男の強い聲はかうも言つた。

女は自分の身上話をしたりなどした。

「是はと言つても貴郎にはまだ私の心はわからない？」さうした女の言葉——この言葉を男はこれまでも何度聞いたか



知れなかつた。しかし幾度聞いても、それは矢張り空しい言葉であつた。かれはいつまでも同じことを繰返して居る二人の間を思はない譯に行かなかつた。

かれは疲れて居た。悶えて居た。かれに取つては、女は蛇のやうであつた。

## 二十二

翌日の夕方まで其處で遊んで、上野に著いた時は、もう全く夜になつて居た。荷物と女とを乗せた一臺の俵は、やがて電燈や瓦斯の明るい町の灯の中に見えなくなつて行つた。

『左様なら、御機嫌よう』

車上から後を振り返つて言つた。研えた其聲は、はつきりと男の耳に残つて聞かれた。町にももう何處となく秋の気分が行きわたつて、星が晴れた空に聴かしげに瞬たいて居た。

男はこれまでも一週間と女に逢はずには居られなかつた。女の居る家には、電話がかゝつて居た。かれはいつも女を電話



口に呼出して長い電話をかけた。

歸つてから三日目にかけた電話には、其家の女中が出て来た。

「今日は留守なんですがね……」

「お座敷に出てるの？」

「屹度宅に行つたんでせうと思ふんですけど……昨日から用事をつけて出たッきりなんですが」

「それぢや今日歸つて来るか何うか解らんねえ？」

「もう歸るでせうと思ふんですけど……」

「それぢやまた……」

かう言つてかれは電話を切つた。電話の前に立つ時には、かれはいつも胸を躍した。其處で聞く女の聲は、殊に一種の微か

な顫動をかれに與へた。女の居間は二階にあつた。「鳥渡お待ち下さい——」かう言つて女中はいつも取次いで呉れた。「もし、貴郎ですか」さう言つて話し出す女の聲は、男の心をそゝるやうにした。

かれはそれまでに電話をかける處を彼方此方と選擇した。

人の聞いて居ないところ、長く話して居ても差支ないところ、忙しくないところ……かれが昨年以來選んで置いたのは、大きな建物の隅にある静かなかけ離れた電話で、其處には滅多に人も遣つて來なかつた。小さい電話室の戸を閉切つてさへ了ふと、何を話しても外から聞かれるやうな憂はなかつた。其處からは硝子戸を隔て、だらだらくだりになつた綺麗な敷石と、暢氣



な顔をして立つて居る交番の巡査と、大きな赤煉瓦の建物とが見えた。受話器を耳にしたかれは、それを見ながら、いつもそれはする心持で、相手の出て来るのを待つて居た。

小さい狭い電話室、それほどかれの一喜一憂を支配したものはなかつた。その中で、かれは悶えたり苦んだり喜んだり絶望したりした。電話を切つてから、ぶるぶると身を戦はせて、三四分黙つて立盡して居たこともあつた。蒼い痙攣した顔をして、其處から出て来たことなどもあつた。時にはまた、晴々した嬉しうな顔に無限の喜を湛えて出て来た。

夜遅くかけに行く時には、建物の中はヒツツリとして、一隅に一箇點いてゐる電気ランプの下で、卓に凭りかゝつて、若い宿直

の男が雑誌などを讀んで居た。轉寢などをして居ることもあつた。

四日目にかれは其處からまた電話をかけた。其時は女は出て来た。

座敷で見た女は、山で見た女とは餘程調子が變つて居た。言葉でも、態度でも、何處となく生々したところがあつた。長く裾を引いた紹御召の姿は、別な人かと思はれるやうに艶に見えた。「留守にした間そりや随分忙しかつたんですッて」かう言つて、敷島を指と指との間に挟んでスパスパと吸つて見せて、「宅



に行くとも母さんにすつかり小言を言はれて了つてよ。本當に子供ちやあるまいし、いくら體が自由だからつて、慾がないにも程があるッて、かうなんでせう。……私腹が立つたから、喧嘩して遣つたわ』

無邪氣な、何も苦勞もないといふやうな快活な調子で、言葉を續いで、『人間ッて勝手なものね、散々人に世話をさせて置いて……』

肥つた女將や、其處に聘ばれて來た藝妓などに向つては、山の話を得意になつて話して聞かせた。怖かつた瀑の話、面白かつた舟遊山の話などは、人々を羨ましがらせた。ヘンリツタの話をしては、『それは綺麗な若い西洋人よ』などと言つた。女將

は貰つた土産の禮を繰返して言つた。

久し振で聞いた三味線の音は、男の心にさまざまの追懷を齎して來た。『残る暑さ』や『萩桔梗』などを女達は弾いた。三味線を傍に置いて、

『暫く弾かないと、變ね』

女はかう言つて、『糸だこが、ほら、こんなに小さくなつてよ』

ダイヤの指環をはめた細い華奢な指を男に見せた。

其夜遅く、女は男を送つて、細い静かな通りを歩いて來た。

『もう逢つた？』

突如にかう男が訊くと、

『逢つたッて、誰に？』



「言はないでも解つてるぢやないか」

女は笑つて、

「あの人？ 逢つてよ」

すぐ男の手を握つて、「逢つても好くつてね」

「悪くツタツて仕方がないさ」

暫く黙つて歩きながら、

「本當を言へば、うそよ。あんな人になど逢ひたくないわ。あ

んなやきもちやきなんか」

「隠さなくつたツて好いよ。ちやんと知つて居るんだから」

「だつてうそですもの。此間歸つて、宅に昨日まで行つて居たんですから、逢ふ間などないぢやありませんか」

「そんならそれで好いさ」

「厭よ、此頃は貴郎は本當に邪推深くなつたんですもの。すぐ怒つたり何かするんですもの」

「怒つてやしないよ」

「さう？ 怒りやしなくつて？ ぢや好いけども……」

二人はその細い通を抜けて、濠端に出て、其處から大きな公園へと入つて行つた。二人に取つては、この公園は記念の多い場所であつた。其處には、電燈が青白くポツラの葉裏に照つて居た。いつもの門の處まで行つて、別を告げて、其處から男は電車に乗つた。



## 二十二

疑惑は絶える間がなかつた。かれは依然として山に行かない以前の重荷と苦悶とに惱まれる人であつた。唯一の味方と信じて居た時も、容易にかれのために解決を與へるやうな機会をつくつては呉れなかつた。

因が因を成して行つた。追憶が追憶を生んで行つた。嬉しかつたこと、喜ばしかつたことばかりではなかつた。腹を立てたことも、不愉快な思ひをしたことも、矢張かれ等の間の色彩を濃くする有力な材料となつた。

重荷に堪へないで、別れやうとして遣つたことは、却つて二人

の間の關係を深くする一幕に過ぎなかつた。

『私が商賣をして居なければ、貴郎はこんなにはして呉れない』かう女の言つた言葉は、女の言つた意味以外に、深い一種の意味を持つて居ることを男は發見した。男から疑はれるやうな境遇に身を置いて居るといふことは、女にとつて此上ない強味である。其處にかくれて、女は常に男を引張つた。

何うかすると女はこれまで關係した男のことを話して聞かせることがあつた。女は少くとも二度や三度は旦那にひかさされたことがあつたらしかつた。田舎に行つて大きな屋敷に召使に侍づかれて生活して居たこともあつたらしかつた。海に臨んだ高臺の邸にも一年位は居たらしかつた。其處の庭には



雞頭の花が澤山咲いて居て、四目垣の向ふに、晴れた碧い海が繪のやうに見えた。女はさびしいのに堪へかねて、いつもその四目垣に凭りかゝつて、海を見て居た。「其の頃は世の中や男のことはまだよく知らないころでせう。大きな家に老婢と居るのがさびしかつたわ」こんなことを女は言つて聞かせた。「それは皆な話すと面白いわ。私これで随分苦勞をして來たんですからねえ」かうした話をする時には、女は昔を追憶するといふやうななつかしい眼付をするのが常である。

「でも、少しは時々思出すやうな男があるだらうね？」  
かう男が訊くと、

「それはあるわ。悲しくつて、別れてから半月位稼業を休んで

居たことなどもあるわ」

「變なもんだね」

「でも、忘れて行くから不思議ね。段々傷痕が治つて行くんだわねえ」

さういふ話をする時には、かれはその多くの男の中の一人として自分を考へて見ぬ譯に行かなかつた。一人々々過ぎ去つて行つた戀と慾、燃えて、熱して、冷めて、そしていつになく路頭の人になつて行く順序は、歴々と彼の眼の前を通つて行く様になら思はれた。其背景には時の影が寂然として立つて居た。

「こんなことを言つて居る中に、時が経つて、お前がお婆さんになつて、何處かの角でひよつくり邂逅して、マア貴郎！ ッて言



ふやうなことがあつたら、面白いだらうな』

『本當にねえ』

かう言つて互に笑つたこともあつた。

しかしこんな話をしたのも、もう以前のことである。此頃では、さうした気分にはなれなかつた。

逢ひさへすれば好いのであつた。顔を見さへすれば、兎に角それで満足が出来るのであつた。別れる時には、二人はいつも此つぎに逢ふ時と日とを約束した。『それでは御機嫌よう』女の聲は常に男の後に聞えた。

不思議に思はれるほど、其の幻影は常に男の眼の前を離れなかつた。それにのみ唯心が向いて居た。それでも逢つた一日二日は、甘い言葉や柔しい態度やなつかしい表情などの名残の影が、濃く深く身の周圍に残つて居て、『自分の女』といふ觀念が強く男の心を宥めたり慰めたりして居るが、それも風が吹き、雨が降り、日が照つて居る間に段々薄くなつて行つて、あとからは疑惑と不安とが常に新しい絶えざる力を以て頭を擡げて來た。

始めは半月位は何でもなかつた。それがこの頃では十日になり、一週間になり、五日になるのを男は見ただ。女の影の段々薄くなつて行く時のさびしさをも此頃では殊に痛切に感ずるや



うになつて来た。雨の降る庭などをぼんやりと見ながら、終日女のことを考へて暮して居ることなどもあつた。

山から歸つて来てからは、一層さうした思ひに暮すやうな日が多かつた。女の周圍に夜となく晝となく集つて来る男——其の男の中には、何ういふ男が居るか解らない。時の間に巧に女の心を奪ひ去つて了ふものがあるかも知れない。氣の合ふといふことは、時間の問題でもなく、義理人情の問題でもなく、世話をした度数の問題でもなく、單に眼と眼心と心體と體との刹那の投合にあるのであるだけ、それだけ、男はじつとして居られないやうな氣がした。

女の口からちよいちよい洩れる他の男の話もあるが、それよ

りも突然ある第三者が起つて来て、今まで長い間かゝつて漸く作り上げた甘いイリュージョンを時の間に粉微塵に碎いて行つて了ひはせぬかといふ様な氣がして仕方がなかつた。

それでも時にはわざと逢ふ時日を長く延して置いて見ることなどがないでもなかつた。さういふ時には、かれは苦悶を押へて、一日一日と女から来る音信を待つた。大抵電話が懸つて來たり、手紙がソツと朝の郵便箱に入れられてあつたりする。しかし何うかすると五日も六日も消息なしに過ぎて行くことがないでもなかつた。その時にはさもなく、絶望した人のやうに、蒼く澤のない顔をして町の通を歩いて行つた。

其時の意味のない焦燥をかれはこれまでも幾度となく經



験して居た。かれは自分ながら自分の體の自由にならないのに常に業を煮やして居た。

女に逢つた夜でも、女に用事があつて、いつもの處まで送つて來られないことがあつたり、前に約束の座敷があつて、長く待せた揚句に、酒に酔つて長い裾を引摺るやうにして入つて來たりすることなどがあると、男はいつも不快な思ひをせずには居られなかつた。それほどかれの心は女に偏つて居た。

静かな生活——讀書と散歩と旅行とにのみ心を開いてゐた静かな生活、それは今高い空の上になつて了つた。垣にさし透る秋の日影を見ても、もう昔のやうに心を動かさなかつた。

電燈の青白い公園の門の處で、二人はそれから幾度か別れた。

晝のやうに月の明るい夜もあつた。



## 二十四

一夜女は容易に遣つて來なかつた。

其處の女將や女中は、いろ／＼にして電話をかけて呉れた。

『居ない譯がないんですけれど』かう言つて女中が出たり入つたりした。席を賑かにする爲めに聘んだいつもの女達の三味線もつひに歡びを成さなかつた。

『本當に何處に行つたんでせうね。七時頃ですツて、初め行つた處はちやんと分つて居るんですけれど……。いゝえお茶屋ぢやないんですよ。ちき近所の唯の家なんですがね。其處に一時間ほど居て、夫から出かけた後が解らないんですよ。もう

十一時も過ぎましたね。本當に困つて了ふよ』如才のない女將は其處に入つて來た女中の方を向いて『お前、宅の方にも電報をかけるやうに檢番に頼んだかえ?』

『え、先程さう申しました。もう返事が參る頃でせう』

『ことに寄ると、宅に行つたのかも知れないよ。あの妓は氣まぐれな子だから』かう言つて女將は銚子を手にして見て、『これは駄目だよ、お前。熱いのを持つてお出で』

女中は纏て爛をした徳利を運で來た。『まだ何とも返事がなにかえ……。困つたねえ、家に居ると言ふから、先程のお電話にかうしてお出になるやうに申上げたのに……。本當に困つて了ふよ……。一度聞いて見ませう』かう言つて笑ひながら女將は



出て行つた。

男は悪く酔つて居た。三時間も前から押へに押へて飲んで居た酒は、決して少量ではなかつた。疑惑も盛んに出た。行方をおまでも突詰めて見やう、といふ意地もかなり強かつた。何んなに遅くなつても、逢つて話を聞かなければ満足が出来ないやうな氣もした。男は歸るといふことを口から出さなかつた。

女將や女中の言ふことを信用すれば勿論、信用しないでも、十二時過ぎまでには何とか返事があるに相違ない。かう思つてかれは酒を飲んだ。

『宅にも歸つて居りませんさうで……』女中がかう言つて氣

の毒さうな顔をして入つて來た時には、かれは立つて歩くことも出来ないほどに酔つて居た。

歸るにももう電車はなかつた。それにかう酔つて居ては車では危なかつた。で女將と女中とは、寄つてたかつて、男を別室の寢床の中につれて行つた。

男は久しい間眼を見開いて居た。平生の温順しいのに似もつかないやうに、『おい何うした？』を連呼した。

女は何うして居るか知れたものでなかつた。かう考へると、男は居ても立つても居られないやうな焦燥を心に感じた。一人でこんな處にこんなにして居たッて仕方がない。かうも思つた。しかし矢つ張り女には逢ひたかつた。歸るといふ氣分



には何うしてもなれない。「まア貴郎——」かう言つて女が入つて来さうに思はれて仕方がなかつた。

悶えたり焦れたり考へたりして過して行く一夜は男には此上なく辛かつた。眠るとすぐ悪夢に襲はれた。

「兎に角今夜の七時までには居たんだ。行方が知れないと言つても朝までにはそれが分らないといふことはない——」うつらうつらしてゐる中にも、かれはそれを思つて居た。

Before Dawn — 5つの間にか其處に女が来て居る喜を男は想像した。

あくる朝もかれは自己を一人さびしく寢床の上に見出した。女は遂に Before Dawn の喜をかれに與へなかつた。宿醉の覺ない頭はガンガン鳴つて、起上つて見れば、すぐまた額を枕に當てた。

雨戸を明ける音だの、裏町を通る人の氣勢だの、納豆賣の聲だのを聞き乍ら、かれは長い間大きな眼を明けて天井を見て居た。階梯を昇つて来る足音は、幾度となく外れて別の室に入つて行つた。心の底では、かれはまだ女の来るのを待つて居た。

女中が入つて来ても、かれは容易に起きるやうな氣分にはなれなかつた。床を離れるのが残り惜しいやうな氣もした。「昨夜は飲んだと見えて、頭が痛くつて仕方がない」。平氣を粧つて



言つた男の聲には、一種空虚なところがあつた。

女中は昨夜の申譯を何彼として聞かせた。「今朝も眼が覺めると、すぐかけたんですけれども、まだ分らないんですよ。本當に何うしたんですか、不思議なこともあるもんですねえ」

「好いよ、好いよ、もう放つて置くさ」

「でもねえ、餘り不思議ですから」

「もう何時だえ？」

男はわざと話頭を變へた。

「九時少し前位でせう」

「もうそんなになるかね……」少し考へるやうにして頭を押へて、「もう少しねかして置いて貰つても好いだらう。頭が痛

くつて仕方がないから」

「え、え、御緩り」

かう言つて女中は出て行つた。最後の望も絶えたといふやうに、男は長大息をついて、ごろりと仰向になつて天井を見詰めた。胸につかえて居る大きな塊が絶えず體を動揺させた。かうした思をさせる女を憎む念は、心の底から強く強く起つて來た。

男が起きた時はもうかれこれ十一時に近かつた。飯を食ふやうな氣がしなかつたが、それでもかれは箸を執つた。女將や女中の辯解を聞くのももう煩さくなつた。ゆくりなくかうした事情の下に置かれて、かうした男の未練を女達に見られるの



も腹立しかつた。「好いよ、好いよ、時にはさういふ事だつてあるさ、仕方がないさ」彼はかう言つて其處を出かけた。「ではわかりましたらすぐお知らせしますから」上り端まで送つて出て来た女將の言葉は、かれの頭にいつまでも残つて居た。かれの重い足は行くともなくいつもの公園に入つて行つた。芙蓉は今が盛りで、紅い白い花が晴れた午前の日影に明るく照されて居た。乳母車に子供を乗せた子守だの、若い綺麗な細君を伴つた洋服姿のハイカラな男だの、紫の袴を裾長に穿いた女學生だのが見事に咲いたその花の前を往つたり來たりして居た。公園の中の道には、西洋婦人を乗せた二頭立の馬車が威勢よく轆つて行つた。

噴水の傍らには子供達が多く集つて居た。かれは其處を通つて、樹の繁つて居る人の居ない静かな處をわちこちとさがして、其處にあるベンチに腰をかけた。



## 二十五

ある日、女から電話が悪つて来た。

「私、四五日留守にしても好う御座んすか」かうその電話は言つた。「また此間のやうな行違ひがあるといけないから……。」

好う御座んすわねえ。行つても？」

「何處に行くんだえ？」

「彼處よ。此間話して置いたでせう」その聲は一種の笑を含んで居た。

「何時行くんだえ？」

「よければ今夜行かうと思ふの……。好いわねえ。ぢき歸つ

て来ますよ」

此方の返事を聞かうともせず、「ぢや御機嫌よう。お土産を持つて来てよ」

男が何か言はうとする中に、その電話は逸早く切れて了つた。此間逢つた時、女は其話をして居た。「貴郎がいけないッて言へば私よすわ……。」男の顔を見て、「でも好いでせう。私まだ彼方見たことがないから……大丈夫よ。そんな氣で行くんぢやないのよ。」其時女は嬌笑を顔に湛えて居た。男は、「好いとも好いとも、行つて来る方が好い。さう言ふ時でなくつては上方見物は出来やしない」かう言つて機嫌よく笑つた。男の身にしては、かう打明けて相談されるのが嬉しかつた。



でも電話が悪つて来て、いざ行くとなると、流石に心が躍らない譯に行かなかつた。今少し詳しく内容を聞きたいやうな氣もした。餘り早く切つて了つた電話も惜しかつた。

男は其客のことをかなり詳しく知つて居た。餘所ながら見たこともある。色の白い丈の高い意氣な、役者のやうな男。「女にはあつした男が好いんだね」こんなことをわざと言つて見たこともあつた。

かれは女の口から聞く其客の話と女の其客に對する態度とから、其の關係の如何なる程度にあるかを常に判斷して、決して恐るべき競争者でないことを知つて居た。——でも矢張安んじて女を其手に任かすことが出来なかつた。かれは二時間は

どしてから改めて電話を女の家にかけて見た。女はもう家には居なかつた。

山に出かけた時には男の方から女に離れて見やうとした。

今度は——事情は違ふにしても——女の方から男に離れて行つた形になつた。女の行つた處には男の本宅もあれば、女を誘惑するあらゆる有力なものがある。かれは山に行つた時の自己の孤獨を思ひ出した。

やがてかれは東海道の長い汽車に乗つて居る女を想像する人であつた。一等室の寢臺車や、白く垂れたカーテンや、亂れた髪を直す爲に明方に女の入つて行く化粧室や、汽車の旅に疲れた切た女の顔や、さうしたものが、海だの山だの町だのと一緒に絶



えずかれの想像を往つたり來たりした。つとめて軽い心持で居やうとしても、それは駄目であつた。

『兎に角己に相談して呉れた。』其處が彼に取つての唯一の隠れ場所であつた。苦しくなると、かれはいつも其處に通れた。はかない憐むべきかくれ場所であることを自覺しながらも、かれは其處にかくれるより他に仕方がなかつた。

かれの住んで居る都會の町、其處に女が居ない。電話をかけても居ない、訪ねて行つても居ない。さうした事實は男に取つては大きな事實であることが段々解つて來た。後にはこの事實が永久に續きはしないかとさへ疑はれた。

一日二日と經つて行つた。秋雨が蕭々と續いて降つた。かれの想像は一刻も女の傍を離れなかつた。蛇の目傘をさして、男に伴れられて東山あたりの大きな寺の石段を登つて行く女が見えたり、河に臨んだ瀟洒な料理屋の欄干に、だらしない風をして酔つた身を凭せかけて居る艶な姿が見えたりした。常に其身に與へて呉れる體質から來る快樂、それを矢張惜し氣もななく他の男に與へて居るといふことがかれには堪らなく苦しかつた。

雨の中を徹かに匂つて來る木犀のかをりも、何處か女の匂ひに似て居た。一種言ふに言はれないなつかしい匂ひ、それを思ふために、かれは雨を侵して一枚折つて來て、藍の模様の白く出



てゐる一輪挿にさして、それを机の上に置いた。

假寝などをして居ると、微かにそれが夢の中に匂つて来た。

其處に女が居た。なつかしい匂を持つた女が居た。かれは苦

痛と快樂との縫れ合つた思ひに心を惱しながら辛うじて目を

送つて行つた。

町で見る多くの女、それも總てかれを刺戟した。藍蛇の目の

傘を見てもかれの體は戦えた。派手な襟紅い綺麗な袖口、房々

した髪、それが皆なかれに取つては女を思ひ出させる材料とな

つた。

かれはせめて女から来る繪葉書を持つて居た。「繪葉書位そ

れはよこすわ。……お土産も買つて来るわ。何かあつちから

送りませうか、貴郎の好きな物？」女はかう言つて居た。しか

しかれば徒らにその消息の來るのを待つ身であつた。

雨は猶續いて降つた。縁側の硝子戸から覗いて見る門の郵

便箱はいつも空であつた。たまたま手紙が白く見えて居るこ

とがあつて、雨を銜いてわざわざ行つて見ても、それは多くはつ

まらぬ用事のない手紙であつた。

一日、ある電車の停留場から藍蛇の目の傘を持つて乗つて來

た女があつた。それは意氣なコートを着た髪綺麗な十八九

位の女であつた。髪はふつくりと出て居た。何ういふ境遇の

女であるかは一目見てすぐ分つた。

其女は發車しかけた電車によるけながら、人々に見られるの



を恥かしさうに顔を赤くして、やがてかれの席の筋違のところ  
 に来て腰をかけた。矢張眼と眼の間の遠い女であつた。かれ  
 はその女の境遇と心持と感情とをすぐ知ることが出来た。其  
 の停留場の附近には、かれの曾つて往來した狹斜があつた。ま  
 たこの先には、さうした女をよく出かけて行く小芝居があつた。  
 かれは絶えず其女の方を見て居た。さういふ社會に入つて  
 からまだいくらかも月日を経て居ないといふことは、耻しさうに  
 して居るその態度で解つた。客の席に出ても、姐さんの前を憚  
 つたり、さまつた旦那のある若い綺麗な妓の前に小さくなつた  
 りして、三味線も碌に弾かないといふやうな女である。かれは  
 今までにも既にさういふ女の多くを知つて居る。もし女が東

京に居たなら、一顧の價値もなかつたに相違ない。しかし其日  
 は不思議にも其女が眼についた。  
 下りる停留場で、ウツカリしてゐて、運轉手がもう車臺を動か  
 さうとしてゐる頃に、其女は立上つた。女が重い戸を明けた時  
 には、車掌の笛は鳴つて電車は動き出して居た。女は耻かしさ  
 うにして、また元の席に戻つた。悪すれのしなない無邪氣なさま  
 をかれはじつと見て居た。

女の傘には赤い漆で名が書いてあつた。——友子

電話はいつも『まだ戻つて参りません』と言つた。四日が



五日になり六日になつた。女からの消息もなかつた。家に居る時は男は絶えず苦しうな長大息を吐いて居た。戸外では町の賑かなのも、人々の楽しうなのも、電車を通るのも、何も彼も眼にも頭にも入らないといふやうに、首を俛れてぼんやりして歩いた。顔には暗い影が歴々と見えてゐた。人と話しをしながらも、それは聞かずに、女のことをのみ思つて居て、トンチンカンな挨拶をすることなども度々あつた。大勢人の居るところでは、隅の方に小さくなつて、椅子に凭り懸つて、額に手を當てたりなどして居た。

『何うかしましたか、君？』

かういふ質問を受けたことも一度や二度ではなかつた。か

れはその度毎に痛い傷痕に觸られるやうな氣がした。一週間の午後、小さいいつもの電話室は、またかれの姿を其中に入れた。折悪しく混線した電話は、容易にその番號をさへ出さなかつた。かれは焦れに焦れて、電話器の壊れるほどベルを鳴した。漸く出た女中は知らない女で、『いつお歸りになりますかわかりません……出先のことですから』などと言つた。かれは念を押す爲めに、更に其處の檢番の番號をさがして、電話をかけて見た。

『遠出がつけてあります』

かう其電話は素氣なく言つて切れた。歸つて來て居りながら歸らぬ振をしてゐるのではないかと



いふ疑念は、兎に角これで晴れた。かれはそれで満足しなければならなかつた。女の手紙が今日こそは来て居る！ かう思ひながら、かれはいつも家の方に歸つて行つた。

かれは其頃かなりの金を懐ろにして居た。しかし其金も女が居なくつては何の効もなかつた。金は何んなにあつても、山ほど積んであつても、女が居なくつては駄目だ。かれは女の爲めには、其財布の中のあらゆる金を捨て、も惜しくないと思つた。生きて居る意味の對象がその女である以上、その女を失つては、かれの爲めに生存の意味の破滅と言はなければならなかつた。かれは女の爲めに家を亡ぼした人達のことなどを考へながら、電車の停留場へと歩いて行つた。

十日経つても、何等の便を受取ることの出来なかつたかれは、もうじつとして居られなかつた。一週間目に受けた侮辱に懲りて、今度は向ふからかけて来るまで、二度と電話口の前に立つまいと決心したかれも、今はベルを鳴らさずには居られなかつた。しかし其電話も矢張失望に終つた。女はまだ歸つて居なかつた。

日が暮れてから二時間ほど経つて、かれは停留場に近い狭い賑かな通りに其の姿を見せた。かれは酔つて居た。久しく行つたことのない家の女中は、威勢よく格子戸の明いたのを耳にして、硝子障子の中から顔を半分出して見て居たが、『まア、貴郎ですか——本當におめづらしい！』かう言いて、かれを後から



押すやうにして奥の間につれて行つた。  
 かれは室の中央にある茶湯臺の傍に長く身を横へた。かな  
 り深く酔つて居るかれには、時間といふ觀念はもうなかつた。  
 ふと氣が附くと、いつか其處に二三人の藝妓が来て居て、何か頻  
 りに饒舌つて居た。皆な知つて居る顔であつた。  
 『友子といふのが此土地に居るだらう』不意にかれは思ひ出  
 したやうに言つた。

夜は更けてもその一間の騒ぎは容易に止まなかつた。梧桐  
 と松とを前にした室の障子には、女の姿や三味線の影が映つた

り消えたりした。『まア賑かねえ！』女將はかう言つて入つて  
 來た。

女達も酔つて居た。『お女將さん！』など、黃い聲を立て、  
 裾もあらはに、其傍に踏るやうにして寄つて行くものもあつた。  
 一人の女は、『好いわねえ、貴郎、今日は酔つても』かう言つて、グ  
 イグイ酒を飲んだ。

姐さんのあばれるのを、お酌達は傍に離れて見て居た。酔つ  
 た男の前には、虹だの紫だの、白だの、色彩がチラチラした。黄  
 い塵が眼の前を舞つて通つた。

『おい、もつと三味線を弾け。もう少し騒がうぢやないか』か  
 ういふ男の聲につれて、三味線はまた盛に鳴り出した。お酌達



は賑やかにかつばれを踊つた。

男にはこの騒ぎの静まるのが堪へられない苦痛のやうに見えた。旅に行つた女の姿が絶えずかれの頭の中にあつた。「もつと飲んで騒がうぢやないか」かれは徳利を押しつけるやうにして女達の盃に酒をついだ。

「貴郎、今日は何うかしましたね！」

先程からその状態を見て居た女中は、男の顔を見い見い言つた。こんな騒いだり飲んだりすることは、かれに取つてはこれまでについぞためしのなかつたことである。

厠に行かうとして立上つた男の脚は、それでも流石にフラフラして居た。「危なう御座んすよ」かう言ひながら女中は後か

ら跟いて行つた。

「貴郎何うかしてね？」

「何故？」

「でも、こんなことは珍らしいから」

女中は押すやうにして男を厠の中に入れて、男が出て来た時には、其處に電車の中で見た女が立つて居た。

其女は一時間ほど前に遣つて来た。室に入るや否「君は何處かで僕を見たことがあるだらう？」かう無遠慮に男は言つた。女はじつと男の方を見て居たが、少し考へるやうにして、

「さうね……何處かで御目にかつたやうですけれど……」  
傍に姐さん達の居るのを見て、さまりが悪るさうに其處に小さ



くやつて坐つた。三味線も弾かなかつた。唄もうたはなかつた。「一つやつたら好いぢやないか？」かう言はれても「駄目よ私なんか」かう言つて黙つて坐つて居た。

男が廁から奥の一間に戻つて來た時には、姐さん達ももう其處に居なかつた。「何んだ、もう片附けるのか？」かう女中に言ふと、「でももう時間過ぎよ、貴郎」

「あゝあゝ」

長大息をつきながら男は横に倒れた。

やがて氣が附くと、女は傍に來て坐つて居た。

「何處でお目にかゝつたの？ 私？」

「此間、電車を一つ乗越したぢやないか？」

「まア、厭だ。あの時見て入らしつたの？ 随分お人が悪いわねえ」かう言つて賑やかに笑つて、「私随分、あの時はきまりがわるかつてよ。何うしやうかと思つたわ」

「芝居に行つたんだらう？」

「よく御存じねえ」

夜中に眼を開いたかれの上には、五燭の電燈が暗くついて居た。かれは第一に烈しい渴を覺えて、手を延して枕元の藥罐の水を飲んだ。

スヤスヤと心持好く眠入つて居る女を起さぬやうに靜かに



再び仰向に寝たかれの心は、曾て経験したことの無いほどに暗い佗しいものであつた。體が底の底に陥ちて行くやうにさへ思はれた。かれはじつと電燈の細い赤い線を見て居た。赤い線は丸い電球の中に影をつくつて三筋にも四筋にもなつて見えた。あたりはしんとして居た。その静かな夜が却つてかれの心を動搖させた。

悔むといふ念、其でも言ひ足りない。憎むといふ念、それでも言ひ足りない。はかなむといふ念、それでも言ひ盡せなかつた。複雑した種々な思ひが、彼方からも此方からも襲つて來た。

昨夜聞いた其女の生立やら、境遇やら、まだ深くさうした社會の泥に染まなない無邪氣な心やら、それが浮んで來るかと思ふと、

一方からは男を引著ける巧みな女の心やら、それに絡み付いてひきずられて行く男の心やらが、際限なく思ひ出された。一度陥つては、手も足も抜くことの出來ない泥沼——さういふことも深く考へられた。

かと思ふと、旅に行つた女のまぼろしが、其暗い佗しい心の中に明るく際立って見えて居た。依然としてかれは其女の濃い情を忘れる事が出來ない人であつた。

あさましい人間の醜い心、醜い形、醜い姿、それが恐ろしいまでに歴々と見えるやうに思はれてかれは戰慄した。自分で入つて行つた暗い底は何處まで續いて行くか知れないやうな氣もした。



かれの前には、震へた神経の世界が展げられてあつた。普通の人間は何とも思はずに、平氣に快活に通つて行くライッから、かれは今底の知れない恐怖と神秘とを發見して、かうして落附いて寢ては居られないやうに思はれて來た。暗い夜の一間の中にぼつとり點いて居る電燈、それがかれに大きな破壊を齎らして來はしないか？ 一塊肉の如く自己の傍に横つて居る生物、それが俄然としてかれの一生にある驚くべき變化を齎らして來はしないか？……電燈は急に暗くなつたり明るくなつたりした。

水を打つたやうな夜の沈黙、其處には何の物音もない。何の動搖もない。生息して居る總てのもの、何等の音信もない。

黙……不意に電燈はほつと消えた。

かれは俄かに氣味の悪い温味を自己の體に覺えた。

やがてまた電燈が點いた。

サツといふ音が聞えたと思つたが、それは雨の音であるといふことがやがて解つた。「雨だ！」かうひとりで言つたかれは、もう恐ろしい夜の思ひからいくらか離れて居た。「傘も下駄もない、明日は何うして歸つたら好いだらう？」暫くすると、かれはこんなことを考へてゐた。

かれの冴えた頭は容易に静まらなかつた。段々強くなつて來る雨の音に耳を傾けながら、かれは長い間下駄と傘とのことを考へて大きな眼を開いて居た。



女はスヤスヤ眠つてゐた。

## 二十六

旅に行つた女はやがて歸つて來た。「つい、落附いて見物して居たもんだから……。え、奈良にも、宇治にも行つて見たわ。文樂には毎日のやうに行つたわ」快活な調子で、面白かつた旅の話をして聞かせた。

楽しさうな明るい女の顔を見ることは、兎に角男には嬉しかった。男は長い間の重い壓迫から僅かに通れ得た人のやうに晴々した顔をして居た。

女の居ない間の苦悶を男は始めは少しも顔にあらはさないやうにして居た。つとめて平氣な顔をして、客と一緒に歩いた



旅の話はなしを女をんなから聞いて居た。

「奈良は好いいわねえ。すぐ傍そばまで鹿しかが来るのねえ。可愛かわいいものねえ」かう言いふかと思おもふと、すぐ川かはに臨のぞんだ景色けしきの好いい宇治うぢの旅舎はたきやの話はなしをした。

流石まさかに客きやくについては女をんなは餘あまり多おほくを言いはなかつた。むしろそれを言いはないやうにして居た。しかし、その話はなしの中なかには、いつもその好いい男をとこの客きやくがついて廻まつて居た。其處そこにも此處こゝにもその客きやくの姿すがたが見みえた。それが男をとこの心こゝろを曇くもらせた。

「もう別わかれやうか」

突然とつぜん男をとこはかう言いひ出だした。

その調子てうしがいつものやうに輕かろくないので、女をんなはじつと男をとこの顔かほ

を見た。

「何どうしたの？」

「だつて、僕ぼくだつてつまらないからな。」

女をんなは暫しばらく黙だまつて男をとこの顔かほを見みて居た。

やがて、

「貴郎あなた何どうかしたのね？」

「もう、随分ずぶん長ながく一いっ緒しょに居た。何どうせ別わかれなければならぬのだ。僕ぼくのやうなものに、いつまでも關かゝ係あひをつけて居ては、お前まえだつて、損そんだから。今いまが丁度てうど好いい機き會かいだ。」

「何故なぜそんなことを言いふの？」

「いや、別べつに意い味みはないんだ。かう言いふ幕まくはもう飽あきるほど打う



つて来たからね。何時まで経つたって同じことだ』

女は常に似ず真面目な顔をして居た。男の言ふことが丸で思ひ懸けないといふやうな顔の表情をして、黙つていつまでも男の顔を見て居た。

『それぢや私の行つたのがわるかつたのねえ？』

『何うせ、女には男の心は解りやしない』

『ぢや勘忍して下さい、私はいくらでも謝るわ。私はそんな氣で行つたんぢやないんですから』かう言つて間を置いて、『今更、貴郎にそんなことを言はれては、私は何うして好いか解らなくなるわ。これほど貴郎に世話になつて置いて、そんなことが出来ず私に？ それや手紙をよこさなかつたのはわるか』

つたわ。しかし私は安心してたのよ。貴郎が承知して下さつたんだからと思つて安心してたのよ』

『しかしもう澤山だ』

『何が澤山なの？』女は口惜しさうにして、『別れるなら、それは別れても好いわ。……これでも私はいろいろ貴郎のことを考へて居たのよ。ぢや……』と男の方を見て、『何故、あの時好いつて言つたの？』

男の黙つて居るのを見て、

『貴郎がそんな風に考へて居るなら、見物になど行きやしなかつたわ。……京都なんぞ見たくもなかつたわ』

男は何か謂はうとしたが、胸に上ぼつて来る言葉が、皆な嫉妬



になつたり愚痴になつたりするので、黙まつて女の顔を見て居た。

「何かおつしやいよ」

「だって、僕だって辛かつた」

「だって仕方がないぢやありませんか。」女はかう言つて間を置いて、「貴郎も此頃は本當に解らなくなつてね」

いつもならば、誰がさういふ解らない男にしたとか何とか言つて、笑つて済して了ふのだが、今日は男は何うしてもさういふ気分になれなかつた。かれは難かしい打ち解けない顔をして居た。

「何うせ駄目なんだ」

暫くしてから獨り語のやうに男が言つた。

「何が駄目なの？」

かう言つたが、すぐ追かけて、

「何が駄目なの？ え？ 仰有いよ。私の悪いところはどんなにも謝るわ。だから仰有いよ。何が駄目なの？」

「言つたつて解りやしない」

「解らないことはないわ。私だって随分いろんなことを考へて居たわ。手紙だって、何うかして書いて出したいと思つたんだけど、何うしても書くやうな間がなかつたですもの。それに、私は手紙など上げなくたつて、貴郎がそんなことを考へて居るとは思はなかつたわ。貴郎は何うしても私を信用して下さ



らないのね？」

口惜しさうな表情をして、

『別れたいなら別れて上るわ！』

かうした幕をこれまでにも二人は幾度打つたか知れなかつた。其處に行つて、二人はいつも突當つた。男に取つては、それは暗い佗しい壁であつた。それから先には一歩も出ることの出来ないやうな厚い厚い壁であつた。

男は黙つて居た。

繰返しても繰返しても仕方がないといふやうなことを男は考へて居た。商賣をやめさせて——いつも考へは其處まで進んで行つた。商賣をやめさせるといふことは親譲りの財産の

あるかれに取つてはさう大して難かしいことではなかつた。しかし商賣をやめさせての後には？ それから後は？ それから後は？

兩手を後頭部に組合せて、仰向になつて、天井を見詰めたかれには、女と自分との長い關係が、一幅の繪巻物のやうになつて見ええた。

それは色彩の複雑した繪巻物であつた晴れた日もあれば、曇つた夜もある。時雨の通つて行くところもあれば、小春日のどこかに射して居るところもある。野が見えたり、川が見えたり、賑かな町の通が見えたりする。殆ど破れやうとして僅かについていて居るところなどもある。



丁度ライフが續いて行くやうに、矢張二人の繪巻物は、何處までも續いて行かなければならなかつた。  
 氣が附くと女は泣いて居た。  
 男はそれでもまだ黙つて居た。沈黙——そこから互の理解が生れて來た。居なかつた間の男の熱情は、やがて漲るやうに女の方に灑がれて行つた。

濕つた女の心は柔かな海綿のやうであつた。男の嫉妬も不満もいつかそれに吸はれて行つて了つた。反動から起つて來るやさしい氣分を男は總身に覺えた。

別れやうと言ひ出した自己が却つて別れることの出來ない身であることをかれは深く自覺した。  
 女は長い間眼を半巾で押へて居た。男が身を起したのをもわざと知らないやうな風をして居た。  
 やがてふいと立つて、裾を曳いたまゝ欄干のところへ歩いて行つた。手巾を帯の間に挿んだのが此方からもそれと見えた。で、稍暫く電燈の光線の廣がつた中に女は嫂婷としたその後姿を見せて居たが、やがて靜かに欄干に身を凭せかけて、組合せた手の上に額を載せた。  
 銀杏返しに結つた髪が、長い間暗い夜の闇の中に見えて居た。再び身を起して、座敷に入つて來た女の眼は赤かつた。女は



再び手巾を手に持つて居た。

崩れるやうに其處に坐つて、

「私別れても好いわ」男の顔を見て、

「別れませうね？」

「ウム、別れやう本當に別れやう」

言葉とは正反對に、打解けた氣分が二人の間にあつた。「厭よ、貴郎」男が女の手巾を取らうとすると、かう言つて女はそれを振放つた。やさしく睨んだ眼付には、男の心を搔撈らずには置かないといふやうな一種の表情があつた。

二人はやがて以前の二人であつた。女の居ない間の苦悶——決して口には上すまいと思つた苦悶を男はいつか女に話し

て居た。下駄と傘とを終夜考へて居た話などもした。

「どんな女？」

それを話すと、女はすぐかう言つて聞いた。

「綺麗な女だつた」

「幾歳位？」

「十八位だつた」

「名は何つて言ふの？」

「好いぢやないか、そんなことは聞かんでも……」

「好いぢやありませんか、教へたつて。」かう言つて、「だから嫌

ひサ、男ツて言ふものは……」

女はそれが氣になると言ふやうに、幾度となくその女の名を



聞かうとした。後には聞かすには置かないといふやうな氣勢をすら示して来た。「友子？いゝわ、今度あつちの人に逢つたら聞いて置くわ。……貴郎も随分ねえ、そんな真似をしてないで、それで別れるなんて、人を酷めて」

「何方が酷められたんだか解りやしない」  
「好いわ、さういふ積なら」

かう言つて、女は男の膝のところをびしやりと打つた。盗るゝやうな女の愛情、それが今度は男の方へと強く強く壓迫して来た。「貴郎——」かう言ふ言葉は絶えず男の體を動揺させた。腕と髪と唇と、それにたわいなく打勝たれて行く佻しさを男は感せずには居られなかつた。「別れるなんて氣の強いこ

とを仰有い。ちやんと知つてますよ。私から遁れることの出来る「貴郎ですか」かう女が言つて居るやうに男には見えた。



## 二十七

町を離れて、瀟洒な旅館がところどころにあつた。樹立の中から二階の欄干の見える家では、奥に瀧が落ちて居て、何だか山にでも来るやうに思はれた。崖に凭るやうにつくられてある大きな家からは、汽車の通る野を隔て、遙かに晴れた海が眺められた。

中には茶室が、つた意気な小さな板葺の家を廣い庭の彼方此方につくつて置く家などもあつた。綺麗に打水をした敷石を傳つて来る女の後齒の下駄の音は、艶に聞えた。

人達はゴム輪の車を輾らせたり、自動車のけた、まじい音を

立てたりして、さうした旅館に出懸けて行つた。其處に行く路には、場末の暗い町があつたり、河に沿つた長いさびしい土手があつたりした。明るい車の灯は更けた夜の闇を破つて威勢よく光つた。

其處に居る女中達は、多くは意気な銀杏返に結つて、お召の前垂をして、翡翠の簪などを挿して居た。「入らしやいまし——」から言つて賑かに客を迎へた。

静かに世をかけ離れたといふやうな室が多かつた。四疊半、六疊、三疊、茶かけの幅物の下には、その節毎の草花などがあつたりと生けてあつた。

海の見える高臺の旅館には、屋根のある長い廊下が此方から



彼方へと傳つて行くやうに出来て居た。女中達の居る處は、丁度その真中になつてゐて、其處にかけてある電鈴は、鳴つただけで、其室の番號が知れるやうに仕かけてあつた。女中は、長い廊下を通つて、階段を上つて、入口の戸の鍵を外して、そして客をそのかけ離れた室へと案内して行つた。

風呂場は何處の家でも綺麗に廣くつくられてあつた。三和土になつて居るところもあれば、贅澤の檜木で流しを張つて置くところもあつた。板の間には、白粉の匂ひのする大きな鏡臺が置かれてあつて、その鏡には絶えず綺麗な女の顔が映つた。越後者らしい三助は、湯の加減を見たり、客の背中を流したりした。

川に臨んだ家の月の夜は、丁度繪のやうであつた。對岸の家々の灯の影は、長く水に落ちてチラチラして居た。銀のやうな月の光は、岸に繁つた樹立の葉を篩して、溶々と流れる水に美しく碎けて見えた。三味線の意氣な音縮に交つて、女の笑ふ聲が静かに纏れて聞えた。

たふたふと寄せて来る水の音を、夜中聞いて居るといふやうな水に近い室もあつた。岸に近く漕いで行く船は、をりをり茶湯臺を真中にして、女に三味線を弾かせて、小聲で唄をうたつて居る客を樹立のしげみに見ることなどもあつた。

静かなところ、都會の響の聞えないところ、鳥渡世を離れた心持になることの出来るやうなところ、さういふ處を選んで、人



々は出かけて行つた。都から二時間で行ける海岸の停車場、其處にもさうした旅館が常に客を待つて居た。

二人はさうした旅館によく出かけて行つた。女中達はバナマの帽子を冠つた男と紹縮緬の羽織を着た女とを、いつも離れた一間へと導いた。

滅多に土地の女を聘ふやうなこともなければ、深酒をして騒ぐやうなこともなかつた。女中が行つて見ると、いつも静かに何か話し合つて居たことが多かつた。「姐さん、サイダを頂戴な」女はこんなことを言つた。

秋草の見事に咲いた庭を前にして静かに半日を過した時には、秋雨が人の心を濡すやうに蕭々と降つて居た。其時何處か遠くで歌澤か何かを爪弾で弾て居るのを聞いて、女は急に、「何か弾きませうか」かう言つて三味線を取寄せて、楽しさうな顔付をして、お得意の端唄をしめやかに弾いた。……さういふ時には、柔かい砂にじつと染み込んで行くやうな、一種濕ひを持つたなつかしさが二人の心に歌曲のやうになつて通つて行つた。男は胸の痛くなる様な微かな悲哀のメロヂーを其身に感せずには居られなかつた。

昔から傳つて來た歌曲の悲哀、其處には遺瀨ない思だの、あきらめてもあきらめられない心だの、言つても盡きない愚痴だの、



別れて行く戀の悲みだのが小さい星のやうになつて残つて光つて居た。それを唄つて聞かせる女の聲は低かつた。女は時々三味線の手を止めて、『本當に歌の通りね。私何うかすると、家に居ても三味線が弾きたくなつて、一人で弾いて居るとなどがあつてよ。……不思議ねえ、矢張身につたまされるんだわねえ。悲しくなつて、涙が出ることももあるわ』かう言つて女は靜かに笑つて見せた。やさしい心と歌曲と三味線の音と、それにしめやかに降る絲のやうな雨と、それが二人の柔かな心に靜かな濃い影を織り込んで行つた。

時には二人はわざと車を捨て、場末の町を歩いて行くことなどもあつた。乾物屋、八百屋、肴屋、其處には髪を箒のやうにし

た上さんが胸をはだけて、子供に乳を飲ませて居たりなどした。

『あんなお上さんを見ても、何だか羨しいやうな氣がしてよ。……早く人の奥様になりたい』歩きながら女はこんなことを言つた。町から裏通に入ると、汚い溝があつたり、大きな塀を取廻した邸があつたりした。田の向ふに見える小さい工場の煙突からは、薄い煙が晴れた秋の空にくつきりと見えて、機械の響が手に取るやうに聞えて來た。

『あの時は嬉しかつた』

男はかう言つて其時の話をした。それは春の初であつた。女はひどい風邪を惹いて長い間床に就いて居た。それが漸く治つて、久し振で逢つた時、女は無造作に髪を櫛卷に丸めて、何う



見ても素人としか見えないうらな風をして居た。二人は其時  
もこの裏道を並んで行つた。いかにも二人は釣合つて見えた。  
「かうして歩けば、貴郎の奥様としか見えないわね」女はかう  
言つて笑ひながら歩いた。その時のことを男は思ひ出した。

「さう？ まだ忘れずに居るの？」

女は其時お召のコートを着て端折つて著た著物の裾の足に  
纏はるのを氣にしなから歩いて居た。軽い咳嗽が絶えず出た。

「大事にしなくつてはいけないせ」かう男は幾度か言つた。

其路には矢張元の通りに、下駄の齒入屋があつたり駄菓子  
賣る婆さんの店があつたりした。秋の午後の日が二人の前に  
あつた。

海の見える高臺の旅館に行つた時には、二人は三味線も弾ずに  
遅くまで話した。何うした拍子か、女の稚い時分の話が出て、そ  
れが容易に盡き様ともしなかつた。女は話を止めて幾度か溜  
息をついた。

それは染々と昔が思ひ出されるやうな夜であつた。離れた  
遠くの室に、客が一組あるばかりで、あとはひっそりとして居た。  
庭にある硝子燈がさびしさうに闇の中に光つて見えた。

「もう夜風は寒いわね」

かう言つて女は障子を閉めたりなどした。雨のやうに繁く



聞える虫の音を時々二人は黙つて聞いた。

男は女の心の段々此方に寄つて来るのを此頃それとなく感  
じた。今迄開けなかつた心の何處かがゆくりなく不意に開け  
て其處から新しい離れ難ない羈絆が出来て来たやうに思はれ  
た。それは女の話やら態度やらで解つた。

女は今まで話さなかつた話を打明けてするやうになつて来  
た。「此頃お座敷に出るのが何だか厭で仕方がない」こんなこ  
とを言つて笑つて見せた。

月が遅く出た。「まア綺麗なお月さんが出ましたよ」女はか  
う言つて縁側に立つて居た。間もなく男も起つて其處に出て  
行つた。並んだ二人の影は、長い間縁側から壁に黒く映つて居

た。

夜霧は白く地上に沈んで見えた。夜汽車が白い烟を立て、  
行くのが夜目にもそれと明かに見える。海もその向うに展げ  
られて見えるやうにさへ思はれた。

夜中に男は厠に起きた。「私も一緒に行くわ」かう言つて女  
は枕元に置いてあつた蠟燭にマッチを摩つた。

厠はかなり遠かつた。階段を下りて、風呂場の傍を通つて、長  
い廊下をすつと向うに突當るやうな處にあつた。

派手な長編絆を着て、裸蠟燭を持つて、素足で女は先に立つた。  
しんとした長い廊下、一方は崖で、一方は廣い野になつて居た。

女の持つてゐる蠟燭は絶えず夜風にチラチラと瞬いた。



一種不思議な心持に男はなつて居た。昔の物語の挿畫にでもありさうな氣がして、かれは靜かに女の後に跟いて行つた。廊下の板の音が踏む毎に微かに鳴つた。

廊下を曲つたところで、女は慌て、蠟燭の火を袖に蔽つた。夜風が俄かに何處からともなく吹いて來た。

やがて厠から出て來た男は、今度は女の爲めに代つて蠟燭を持つてやつた。蠟燭はをりく、夜風に消えさうになつた。かれも矢張袖でそれを蔽つて居た。

『險香ねえ』

やがて其處から出て來た女はかう言つて、男の手から蠟燭を取つた。その灯影に映つた女の顔は際立つて白く見えた。

月はもう高くなつて居た。地上に沈んだ夜霧は、依然として元のまゝであつた。二人は廊下を黙つて歩いて行つた。階段の處で、『まア、よかつた。消えないで……』かう言つて女は蔽つた袖を蠟燭から離した。

海岸の旅館には、その以前にも一度行つたことがある。旅館の女中は、二人の顔を知つて居て、松の林の中にある一番綺麗な室へと案内した。

旅館の前にある大きなふき井からは、綺麗な水が湧き出して居た。朝早く其處で二人は戯談を言ひながら顔を洗つたこと



があつた。男は其時分と今とを較べて歩いて見ない譯に行かなかつた。また其頃は何とも思つて居なかつた。好奇心の方が多つた。女が居やうが居まいが、そんなことは餘り氣にならなかつた。

其時女ははしやいで唄をうつたり三味線を弾いたりした。裾を端折つて、遠淺の海の中に入つて、さも面白さうにして貝を拾つた。今は其時とは丸で氣分が違つて居た。女は戸外に出て見やうともしなかつた。二人は一間に籠つて静かな物語に耽つた。

「何うだ、其處等を歩いて見やうぢやないか」  
かう男から誘はれても、

「よしませうよ」

女はいつもかう言つて、さびしさうにして笑つた。其時から見ると、女は顔も體も著しく瘦せて居た。世の中の苦勞を知らない時期は既に通過した。海も、松原も、遠淺も、女にはめづらしくなかつた。

波の音は遠雷のやうに響いて來た。障子を明けると、松の大きな幹が其處に根を張て居て、海が眩く日に光つて見えた。

二人の間には、過去を追憶するといふやうな話が多かつた。初めて逢つた時の話なども出た。ゆくりなく相逢つて、言葉を交して、それから長く續いて來た間柄が不思議だといふやうな話をした。女は男の青年時代の寫眞を男から貰つて持つ



て居た。その話などもした。「貴郎が十二三の時分ね、私の産れたのは？」かう言つて、女は考へ深い目付をした。

何うした加減か、女は此頃染々した話をするのが好きになつて居た。夢中で過して来た今迄の生活が今になつて振返へられるといふ風にも見えた。

「随分私も暢氣だつたわねえ」

話の前後の關係もなく、女は不意にこんなことを言つたりな

どした。  
午後には、日影が松の細い葉を漉して、暖かに縁側にさし込んできた。男が散歩から歸つて来ると、女は日の光を背に浴びながら、縁側の柱に身を凭せて、喪心した人のやうに海を見て居た。

女は考へ深い目付をしたの  
女は考へ深い目付をしたの

海に沿つた道には、秋の機動演習に出た兵隊達がぞろぞろと通つて行つた。列を離れて、井戸を其處等の家に求めて、濁いた口を釣瓶に當てゝゐる兵士などもある。松原の中には、をりをり演習の銃聲がけたゝましく鳴り響いた。

あくる朝、女中は新聞を枕元に置いて行つた。男が顔を洗つて歸つて来ると、寝衣のまゝで、縁側の處で、それをひろげて見て居た女は、不意に、「まア、お師匠さんの娘が情死した……」

胸の動悸を押へることが出来ないといふやうに、走り讀みに急いで讀んで、「まア、ねえ、何うしてそんな氣に……」

その新聞には、藝者と若い男とがある海岸で情死したことが、詳しく書いてあつた。二人は女の伊達巻と扱帯とをつないで



ぐるぐる體を巻いて居た。男の袂から出た名刺で、男の素生も段々知れて來た。女はある處でかなり賣れた藝者である。

菊の家常香——年十九。

その藝者を女はかねてから知つて居た。年を取つた長唄のお師匠さんの一人娘で、長火鉢の側で時々口を聞いたことなどもある。沈んだ氣質で、何方かと言へば顔はさびしい方であつた。つい半月ほど前にも逢つたと女は話した。情死した人達は、海岸の旅館に五日ほど一緒に來て居て、其日は散歩に出ると言つて出懸けたまゝ歸つて來なかつた。死體

を發見したのは、それから三日ほど経つてからで、其處の岩の陰で鰻を捕つて居た漁師は、波になぶられて居る女の長い髪を見て、吃驚して、それから大騒ぎになつた。かう新聞は書いて居た。

『何んなでしたらうねえ』

男の新聞を読み終るのを待つて、かう言つた女の顔には、心の動悸が歴々と見えて居た。

旅館から出て行く時の心持や、暗い闇の中を辿つて歩いて行く心持や、帯を結んで體に巻きつけた時の心持などが、それと明かに想像されるやうな氣がした。岩陰の波に漂つた長い髪——それが二人の胸に同じやうな感動を與へた。

『お師匠さんが、何んなに吃驚したでせうと思つて……』



かう女が言つたのは、それから暫く経つてからのことであつた。

情死した男の寫眞を見て、『好い男ねえ』と言つて、やがて女は微笑つた。其處まで深く雙方から押詰めて行つた心、それを二人は長い間黙つて考へて居た。

情死それは大抵男の方から誘つて行くものだ。暫くすると二人はこんなことを話して居た。『矢張男が弱かつたのねえ、やさしかつたのねえ、屹度』女の眼には同情の涙が滲み出して居た。

それは尠なからず女の心を動かしたやうに見えた。何ぞと言つては、すぐ話を其方に持つて行つた。最終に女に逢つた時

の話などもして聞かせた。其時女は髪を銀杏返にして、鶉お召の羽織を着て居たが、お師匠さんに何か言はれたと見えて、眼の縁を赤くして居た。お稽古が済んで歸らうとすると、『まア宜しいぢや御座いませんか』と言つて、茶を淹れて菓子などを出して呉れた。女の出で居るところの話などをして、三十分ほど其處に坐つて居た。歸る時にはめづらしく立つて送つて來て呉れた。『孝行で、温順しいので評判な娘さんでしたのねえ』かう言つて考へるやうにして、『でも、羨しいわ……好きな男と一緒に死んだんだから……辛い思ひをして生きて居たつてつまらない。』

岩陰の浪になぶられて漂つた長い髪、それが男の心にも矢張



長い間絡みついて居た。女は午飯の時にも、『何んだか考へると、御膳も食べたくないわ』など、言つて居た。

午過には男は矢張一人で海岸へと散歩に出かけて行つた。松の間から見える海は、今日は殊に際立つて碧く見える。其處には離れた座敷があつて、今來たらしい若い男女が、縁側に並んで樂しさに話して居る。男はその傍を通つて、細い路を海岸へと出た。かれは行き詰つて女と情死した男のことを考へて居た。

情死の話は二人の間にいつまでもついて廻つて居た。義理

又うねく強

やら人情やらの爲めに、其處まで陥つて行つた心持が羨ましいやうな氣もすれば、恐ろしい様な氣もする。普通の心の状態では知ることの出来ない其境に行つて見たい様な氣もした。

Strong as Death 肉體の滅びた後までも離れまいとしつかり體を結び付けた強い執著、其處には普通の人間の知ることの出来ない不可思議な世界が開けて居た。いかに互に相愛したと言つても、いかに互に離れられないと言つても、其處まで行かなければ、互の戀の終結ではない。男はかう思つて長い間海を見て居た。

海は波を寄せてはかへし、寄せてはかへして居た。そんなことは何うでも構はないと言つて居るやうにも見えた。その同



し無關心な波に漂はされた藻のやうな女の長い髪、それがまたかれの頭を掠めて行つた。

かれの前には二人の戀の行先が明かに展げられて見えた。

女は時々ヒステリックな心の状態に身を置くことがあつた。

さうした場合に言つた言葉が、今かれの胸に生きたものとして蘇つて來た。「私は一人で死ぬのは厭よ」女はかうしたことをよく言つた。

一時間ほどして歸つて來た男は、女がさびしさうにして縁側に立つて居るのを見た。「常香さんが眼について仕方がないのよ」神經の昂つたやうな蒼い顔をして女はこんなことを言つて居た。

「情死する時には、男の方から言ひ出すのね、屹度。私、屹度さうだと思ふわ。男の身が詰つて、何うにも彼うにも行かなくなるんだわねえ。女は男から言はれると、いやだとは言へなくなつて死ぬ氣になるんだわねえ。女は可哀相ねえ。」

女も矢張其身を其場合に置いて居た。

「ほら、御覽なさい、まだこんなに動悸が打つて居るのよ」かう言つて女は男の手を執つて胸に當てさせた。

心臟の鼓動は高く響いて居た。

情死したその海岸を、かねて二人が知つてゐるだけそれだけ、その印象が強く胸に來たのであつた。その旅館も二人が曾つて行つて泊つたことのある旅館である。手を取つて若い男女



が闇に死に赴いた路は、二人が春の日のどかな光を浴びながら並んで歩いて行つた路である。二人が行つた時には見晴しの好い崖の上に、如才ない婆さんの出した茶店があつて、そこで繪葉書だの貝類だのを買つた。土産にする爲の鰯をも其處で購めた。

『あの崖から飛込んだのねえ、屹度』

二人はいつまでも其話をした。

『私達も死ぬ時は、あそこで死にませうね』暫く経つと女はかう言つて笑つた。その時には二人はもう大分其話から離れて居た。

夜になつてから、二人は菓物を取寄せた。朱塗の盆には五箇

ほどの梨の實と鋭利な小刀とが載せてあつた。寝る前に跡を片附けに来た女中は、菓物がまだ残つてゐるのを見て、氣をきかせて、そのまゝその盆を其處に置いて行かうとした。と女は後から慌て、呼留めて、『姐さん、これ持つて行つて頂戴…… 菓物なんて置いて行つては厭よ。』



## 二十八

かれはこれまでの自分のライフの上に濃い淡い影を投げて行つた女の數々を思ひ浮べて居た。かれはソファの上に身を横へて居た。

長く一緒に居て別れてから、滅多に思ひ出さないやうな女もあれば、一月ばかりの中に、互に心を突詰めて思ひもかけず其處から覺めて行つたやうな女もあつた。深い關係もなく、たい逢つて離れて行つた女でありながら心と心とが未だに觸れて居て、何處かで不意に邂逅したならず、燃えて行くであらうと思はれるやうなものもあつた。

旅で逢つて、二日其處に居て、それで別れて來た女は、何故かいつまでも深く頭に残つて居た。長い年月を経た今でも、すぐはつきりと眼の前に浮んで來た。肌の白い、眼付の可愛い、やさしい口の利き方をする女であつた。「貴郎、もうぼんちがあるだつしやろ」かう言つて微笑かに笑つた顔は彫りつけられたやうに常に眼の前にあつた。

其女は忘れやうとしても忘れられなかつた。いつか出懸けて行つて逢はう逢はうと思つて居る中に、年月が経つて行つた。今でもかれは、何うかすると、手蔓を求めて、其處から其處へと探して行つて逢つて見たいと思つて居る。

烈しい戀の仕方をする女もあつた。其女とはよく喧嘩をし



た。始めはその口説の面白いに引かれて居たが、後にはそれが煩はしくなつて來た。あれつ切りにならうとは思ひもかけないやうな別れ方をして別れて來た。不思議なのは、其後電話もかけて來なければ、手紙も寄さないことだ。更に不思議なのは、女はかれの常に往來する處に、いまだに出て居て、時々かれと顔を合せては平氣で笑つて居た。

あの女は長い間心を押へるやうに押へるやうにとして居た。何にも言はない方ではあるが、おとなしい、しんみりした、よく涙を滴す女であつた。讀んだ小説の人物を實際にある人の様にして話した。夢の話をするのが好きで、自分が金魚になつて泳いで居た話等をして聞かせた。その女は男の方の戀の覺める

時分になつて、始めて漲るやうな心を注いで來た。

後には、其女はよく酒を飲んだ。黙つて蒼い顔をして、さす盃を幾杯でも見事に受けて飲んだ。裾を引いたまゝ、足袋、跣足で庭の敷石の上などを平氣で歩いた。

かれはいつの間にか今の女のことを考へて居た。此間逢つた時、『女にも忘れられないやうな男が幾人もあるだらうねえ。丁度珠數の珠のやうなもんだねえ。小さい珠を繋いで居る親玉のやうなのが五つや六つはあるだらう？』こんなことを言つたことをかれは思ひ出して居た。女は其時笑つて種々と男のことを話して聞かせた。

ライフの中の無数の男と女との關係が不思議の様にかれに



は思はれて来た。何處まで行つて盡きることか、それが解らなかつた。逢へば戀人離れ、ば路傍の人、さういふところがあるかと思へば、切つても切つても切れずに、終には身を亡して了ふやうな烈しい強いところもあつた。それは肉體まで行かなければ解釋の出来ないやうなものであつた。

不思議な人生——かれはじつと空間を見詰めて居た。

## 二十九

女は此頃何うかして居た。

検番から懸つて来るお座敷も、少し氣分が悪いからとか、用事がありませんからとか言つて断ることが多かつた。夜遅く二階で本など読んで居ると、隣の若い藝者達が下駄を鳴して元氣よく出かけて行くのが手に取るやうに聞えた。

「何うしたの？」

其處等で顔を見合わせる友達は、皆なかう言つて不思議にした。「本當に何うしたの？ 此頃ちつとも顔を見せないぢやありませんか。……それやあなたなんぞ商賣しなくつても好いん



でせうけれど……」かねて行きつけて居る待合の女中は、軽い調子で女の顔を見い見いつた。

昨年あたりは毎日四座敷や五座敷はかゝしたことがなかつた。春のお約束の敷なども一生懸命に彼方此方と頼み廻つて、検番にかけてある札の順番を競つて見たことなどもある。何んな陰気なお座敷にも、元氣の好い明るい顔をして居るのが土地の評判になつて、『あの妓は如才ない』と言はれて居た。

日頃最員にして呉れるある女將からは、『何したのさ？ お前さん。稼業だけは怠けずになくつてはいけませんよ』かう言われたのももう度々であつた。其度毎に、『本當にお上さん、今月からは稼ぐわ……私だつて困るんですけれど……何だか

氣分が悪かつたり、いろんなことがあるんですもの』しかしその今月からは二月にも三月にもなつても、女は矢張怠け勝に日を送つて居た。

お稽古にも行つたり行かなかつたりして居た。折角始めた常盤津の師匠の稽古にも一月ほど行つて止して了つた。かと思ふと、これから一生懸命になつて、東京中のあらゆる名高い師匠の許に通つて専心藝を磨からかなどと思ふこともあつた。陶宮の上手なお婆さんが赤坂にゐるのを、わざわざ尋ねて行つて、その身の上を見て貰つたことなどもあつた。そのお婆さんは、小綺麗な身装をして、髪を小さい丸鬢にして居た。『貴女は心配するやうなことは御座いませぬ。此十二月になれば自然に運



が向いて来ます』かう言ふかと思ふと、『矢張あなたは一生定つた夫を持つことが出来ません』などと言つた。

活動寫真に入つて、夜を無駄に費して了ふことも勘くなかつた。新派劇を見て、身につまされて、家に歸つてまでも涙が出て仕方がないこともあつた。電車に乗つて、一人で遠くの寄席にも行つた。

看板借になつて居るので、家では別に何も言はなかつたが、それでも、何うかすると、『そんなに遊んで居て損ぢやありませんか。今日も彼方此方から懸つて来てよ』姐さんは笑ひながら言つた。

何も彼もつまらないといふやうな気が絶えずして居た。稼

業の厭なことにも新しく目が覺めて来た。夜遅くかゝつて来たお座敷に平氣で出て行つた自分が不思議のやうにも考へられた。

夜蒲團の中で男の心などいふことを考へて居る時は、ことにさびしかつた。信用の出来ない頼りにならないことばかりで、甘い言葉、優しい言葉、堅く誓つた言葉、それが皆な氷のやうに溶けて流れて、跡も形もなくなつて行くやうなことが多い。若い頃から評判で、ダイアの三つ四つも持つて居た姐さんさへあの人ならばと心を注いで従いて行つた男の無情を今日もつくづく滴して居たことなどをも思ひ出した。

今までに遣つて来たことも繰返して考へられた。普通の人



が聞いたら吃驚するやうなことを平氣でやつて來た。『だって稼業だから仕方がないわ』心の咎めるやうなことに邂逅すといつでもかう自分で辯護した。

いつの間にも覺えるともなく男に對する手管といふやうなものを覺えて居た。男はぢき熱して來た。其時女はわざと離れたやうな形をして見せた。すると男は財産も名譽も生命も惜しくないといふやうに打込んで來るのが例だ。

女の知つて居るある姐さんは、『まだお前さん、そんなことを考へてゐるのかねえ。……そんなことではまだ駄目よ』かう言つていろいろなことを教へて呉れた。

引張れるものは引張れる處まで引張らなければいけない。

別れるのは何でもない。別れる時には悲しい顔をしてさへ居ればそれで好いものだ。かう姐さんは言つた。

女は別れて來た人達のことを時々頭に描いて見た。さういふ人達の記念は、指環だの衣物だのになつて残つて居た。それでも女は手紙だけは丁寧に保存して取つて置いた。ある日、箆を明けると、其處から種々な人の種々な手紙が出て來た。

幾束かの手紙は別々にわけて絹の紐で縛つてあつた。いつもならば心にも留めないで藏つて了ふのが常であつたが、其日は何うした加減か、心がそつちの方に向いて居た。女は絹の紐を解いてそれをひろげて見た。

其處にはいろいなる心が燃えたり悶えたりして居た。もう



一度是非逢つて呉れと言ふのを、何うしても逢はずに別れた男の手紙が一番多かつた。染々するやうな文句がその中に書いてあつた。こんな烈しく男から思はれたことがあるかと思つて女は暫しはそれに讀耽つた。

喧嘩して別れた男の手紙は、細い綺麗な手跡で書いてあつた。この男には女もかなり心を打込んで居た。無理算段をして逢つたことも一度や二度ではなかつた。しかし今考へて見ると、惚れ合つて居たといふよりも、寧ろあたりの騒ぎが大きかつたので、いくらかは見得もあつて、惚れなければならぬやうなこゝとなつて行つたのであつた。その證據には、たとへ喧嘩をして別れたとはいへ、涙一つこぼさず、一月も経つともう其の男の

ことをはすつかり忘れて居た。そればかりではなかつた。半年ほど経つてから、その男は何處かの綺麗な藝者をつれて女の出てゐる隣の座敷に来て騒いで居た。しかし女は別に何とも思はなかつた。

女はふと思ひついて、多くの手紙の中を彼方此方とさがし出した。其處には女の爲めに忘れられない手紙が一通ある筈である。何うしたのか、それが見當らない。女は抽斗を残らず抜いて見た。その手紙は手紙と手紙との間にもみくちやになつて挟つて居た。

讀んで居る中女の眼には涙が滲み出して來た。町の裏通りの綺麗な二階屋に女は其時圍はれて居た。裏には畠を隔て、



汽車の線路が見えて居た。その田舎の富豪の若旦那は其處によく遣つて來た。女中が一人つけてあるばかりで、さびしい退屈な日が多かつた。意氣な中折帽を冠つて、インバネスを著てズツと裏から入つて來た時などは、何とも言へず嬉しかつた。結ひなづけと結婚しなければならなくなつて、其の若旦那とは、泣きの涙で別れ、來た。女は其時分のことを考へて茫然して居た。

手紙を御方此方と讀返して居たが、纏て女は丁寧なそれを元のやうに藏つて、抽斗を閉めて長大息をついた。自分ながらう

かうかと思つて來た。惚れたとか何とか言つても、自分の方から熱情を注いで行つたやうなことは今までも餘りなかつた。男の情を手繰り寄せて、頂上まで昇らせると、其處からいつも熱が覺めて行つた。早く解決をつきたい時には、わざと烈しい情を寄せて見ることなどもあつた。長く引張らうと思ふ男には、つとめて情を惜しむやうに、心を見せぬやうにした。

女は自分の住んで居る社會の狀態やら物語やらに熟して居た。榮えた老舗が一朝にして滅びて行つたのをも見た。若い男が病を得て死んで行くのをも見た。ある女に打込んだ男は、詐欺取財といふ罪名の許に、餓に迫る妻子を置いて、暗い處に行くやうな末路に邂逅した。ある男は、會社の金を多分に費ひ込



んで、その穴を埋めたいばかりに、経験もない相場に手を出して、終には何うにも彼うにもならなくなつて、母親と妻とに遺書を残して、姿を何處へか躲して了つた。其男に關係した女は交情の好い友達だつたので、女はよく其席に取巻に聘ばれて行つた。唄の上手な洒落をよく言ふ、頭の兀げた面白い人であつた。金を湯水のやうに遣つて、五人も六人も藝者を聘んで夜もすがら騒いだ。それと知れた時には、誰も彼も吃驚しないものはなかつた。遺書を手にして、其女は茫然として居た。二三日して刑事が遣つて来て調べたり何かした。「本當にあの人は死んだかも知れないわ……一番後に逢つた時にも變なことを言ふと思つたのよ」其女はかう言つて、毎朝出て来る新聞の三面記事を

注意して讀んで居た。

女の方にもさうした悲劇は勘くなかつた。肺病を客から受けて海岸に二月ほど行つて、間もなく死んで了つたものもあつた。まだ十六にもならないお酌さんで、眼がつぶれるやうな烈しい病氣に罹つて居るのを見た時には、女も思はずツとした。思ひのまゝにならない話が其處にも此處にもあつた。男に打込んで、派手な真似をした女は、ぢき其土地に居られなくなつて住替へをした。

女は依然として稼業を怠けて居た。何ぞと言つては、用事をつけて、父母の家に出かけて行つた。

丸鬚に結つて居ることが多かつた。それを男は不思議にし



て、『何うしたんだえ、此頃は？』から聞かれることも度々であつた。

『だって、つくづくお座敷に行くのが厭なんですよ……此間もある處に行つてゐたら、不意にいやになつて、何うしてもゐるのが厭になつて、お上さんに小言を言はれても何でも歸つて來て了つたのよ。それに、何だか此ごろはイヤに氣分がふさぐのよ』から言つて、女は夜一夜眠られずに考へて居たことなどを話した。かうした社會に居るのがつくづく厭になつたことや、手紙を出して昔のことを考へたことや、意味もなしに悲しくなることや、いろいろなことを打明けて、

『もう私素人になるの』

こんなことを言つては笑つた。手がらもわざとじみな目立たないやうなのを選び、鬘も餘り大きくないやうのを買つて來て、成だけ素人に見えるやうな髪のかみ方をした。『よく似合ふでせう？ これなら、外を歩いても、誰も藝者だと思ふ人はないわねえ』から言つて、低く結つた丸鬘を男に見せた。



## 三十

ある日こんな話をした。

「私素人になつても好い？」

「誰れかして呉れる人があるのかえ」

「それはないこともないわ」

「ぢやして貰つたら好いぢやないか。」

男がかう言ふと、女は笑を眼元に湛えて、じつと男の顔を見て、

「本當？」

男が軽く點頭くのを見て、

「本當に好いの？」

繰返して言つて、「ぢやさうしてよ。本當になつてよ」

ある時はまた次のやうなことも言つた。

「貴郎本當に私のことを思つて居て下さるわねえ」

「何うだか解らない」

「さう、貴郎には解らないの？……でも私が貴郎を思つてゐる

ことは確かだね。それだけは確かだわねえ。」

「それも何うだか解らない」

「でも私はちやんと思つて居ますもの……さう思つて居る本

人が言ふんだからたしかだわ」かう言つて、「思つて居るやう

には貴郎には見えなくつて？」

「見えることもあるが、見えないこともあるねえ」



『さう？』

考へるやうな顔色をして、『ぢや私素人になつて何處かに行つて了つても好くつて？……私もう稼業をしてゐるのがつくづく厭なんですもの』

『行かれちや困るけれど、達つて行くと言ふのなら、仕方がないねえ。いくら思つてゐたつて僕の體ぢやないんだから』

『さう、貴郎の體ぢやなくつて？』

急に調子を高くして、『いくら思つたつて、仕方がないわねえ。

奥さんになれるんぢやなし……』

かう言つて女は突伏して了つた。

それは何うしてか話の調子が裏へ裏へと外れて行くやうな

日であつた。後には女は蒼い眞面目な顔をして黙つて居た。

女の態度に何かかくれた意味があるといふことは男にも知れて居た。『そんなに思はせ振をしないでも好いぢやないか』

男はつとめて心を平らかにして、絶えず笑顔を見せて、其處から女の秘密を聞かうとした。

『そんな……秘密なんて言ふことはありやしないわ。今更、貴郎にそんなことをする女ぢやないけれど……』

『ぢや、隠さずに、本當の心を話して聞かせたつて好いぢやないか』

『え、話してよ』少し間を置いて、『でも、今日は厭……』

『何故だえ？』



『でも、何故か今日は日がわるいやうな気がしますもの……また其中話すわ……そんなに無理に話せて言つたッて女にはそれは出来ないわ。女ッて言ふものは心の狭いものよ。貴郎』  
 こんなことを言ふかと思ふと、『私黙つて何處かに行つて了つたら、貴郎屹度怒るわねえ』など言つた。ある日逢つた時には、『貴郎といふ人に何故私は逢つたんでせうねえ。貴郎さへ居なければ好いの……』。貴郎が居るのが口惜しい』  
 かう言つて男の膝に顔を當たりした。

『私の幸福になることなら貴郎は喜んで聞いて下さるつて言

つたわね……今でもさう？』

『今ぢやもうそんなことは誓はない』

『さう？ ぢや矢張うそだつたのねえ』

彈き懸けた三味線をやめて、思ひ出したやうにして女はこんなことを言つた。男は女の顔を見て居た。

『ぢや……あの』

言ひかけて、男の顔を見て、

『言はうと思つたけど……よすわ。あんな顔をして居るんだもの』

『ぢや何うすれば好いんだ』

『本當に聞いて下さらないんだもの』



「聞いてるよ」

「本當？」

「本當に聞いてるぢやないか。」

女は躊躇したやうな風を見せて、「でも怒るから厭よ」

「怒るか怒らないか、言つて見ないぢや解らない」

「なら、よすわ……」

かう言つて、女はまた三味線を弾き出した。流るゝやうな滑かな調子は、静かな夜に際立つて、冴えて聞えた。

「私、遠くに行かうと思ふの」

暫くしてから、女は思切つたといふやうに。

「でも、まださめた譯ぢやないのよ。貴郎が可いッて言へば、行

かうかしらとも思つたのよ。」

女はかう附加へて言つた。

男にも段々其話がわかつて來た。いろいろたぐり寄せて聞いた話の中には、此間つれられて行つた男が居た。男は此頃此方に出て居た。

「貴郎、怒つて？」

男が黙つて酒を飲んで居るのを見て、女は心配さうに言つた。

「大丈夫だよ。そんなことで怒りやしないよ。」

不思議にも其夜は男には、楽しさうに面白さうに見えた。三味線が頻りに鳴つた。女の軽い聲と男の重い聲とが雜り合つて、四邊に聞えた。女中はいつになく賑かなのを見て、「まアめ



づらしいわねえ。何うかしたのねえ。今夜は？」など、言つた。

男が女と伴れ立つて其處を出たのは、もう餘程遅かつた。二人ともかなり酔つて居た。町ではもう戸を閉めて居た。

「馬鹿な奴！」

男はこの言葉を既に幾度となく女に浴せかけた。氣が附くと、二人はいつか樹の影の深く繁つた處に來て居た。電燈が明るく葉裏を透して見せた。

其處にはベンチがあつた。

女は苦しうにして居た。酒の酔に堪へないと言ふやうに、頭を低れて手を男の膝に乗せて居た。

「おい何うした？ 馬鹿な奴だな。これでも男の心が解らないのか」

かう言つて男はまた女の手を堅く握り緊めた。女はぐたりとして居た。

其夜、女の話聞いて居る中男は絶えず一種の鼓動を胸に覺えた。しかしそれはいつもの烈しい強いものではなかつた。寧ろ靜かに小刻みに押寄せて來るやうなものであつた。哀愁もそれにつれて起つた。

話の中の男の影は、女が言葉を重て行く中に段々濃く明に其

To-night



姿を見せに来た。

日光の山の中に一人で出かけて行つた時のことが思ひ出された。其時それと知つて悶えた心持は忘れられなかつた。あの時出した端書それも頭に上つて来た。

『あの端書を出さなければよかつた』

女の話を知りてゐる中にこんな考へが幾度となく男の頭を通つて行つた。

男は静かに女の話を知りて居た。時々道理らしく點頭いて見せた。

『ぢや別れやうかね』

心を抑へたやうな眞面目な調子で暫くしてから男が言つた。

女は頭を振つて、

『その位なら私こんな苦勞なんかしないわ』

複雑した女の心は容易に言葉で言ひ現はすことが出来ないやうに見えた。女はいろいにしてその心持を男に傳へやうとした。しかしその言葉は多くはツボにはまらずに、他の方に外れて行つた。女はぢれつたさうに、『兎に角別れるなんてそんなことはイヤですから』

『ぢや何うすれば好いんだ？』

『まア好いのよ。そんなに私を酷めないで置いて下さい。もうそんな話よしませうよ、私よすわ』

から言つて女は酒をグイグイ飲んだ。男も一緒に杯を重ね



た。男は其時男に惚れることの出来ない女の可哀相なことを話して聞かせた。

「何故惚れた男に心から惚れることが出来ないんだ。戀しいと思つた男には、ドシドシ惚れて行つたら好いぢやないか。願應せず心でそれを注いで行つたら好いぢやないか。惚れた男に心から思を注ぐことの出来ないのは、男が本當に解つて居ないからだ。さういふ女は一生惚れたやうな心持がして居ても心から男に惚れたんぢやないんだ」

「それは本當よ」

かう言つた女の眼からは涙が溢れ出して居た。

「それは本當よ」女は繰返して言つて、「私などでもよく解る

わ。男の情はあとから解つて来るわ……しかし解つた時はいつでももう遅いのだよ。解つてから追かけて行つたつてそれは駄目よ」

「それは無論さ」

「けどもまたかういふやうな處もあるわねえ。男は女が惚れたやうな素振を見せると、すぐお高くなつてもうこの女は自分のものだつて言ふやうな氣分になるわね。それが見えると、私はすぐ厭になつて了ふわ。さういふ具合で、中途からイヤになつた人はいくらもあるわ。私の性分ねえ、眩度……」

二人はかうしたことを其時盡きずに話した。不思議にも言葉と言葉とに熱があつた。二人は更に一つの戀の障壁を越え



たやうな氣がした。「これでも男の心は解らないか」それを男は酔つて幾度か繰返した。

### 三十一

とてもかうした女からまことの戀を望むことは出来ない。かう思つてかれは山の中に出懸けた。其處でかれは女を忘れる方法を講じやうとした。しかし今では其時のやうな激した單純な心持はもう起らなかつた。二人の關係は其時とは著しく違つて居た。氣分も違つて居た。自分ながら不思議に思はれるほど静かな落附いた氣分が續いた。かれは女の悶えて居るのを知つて居た。また自分から容易に離れられなくなつて居るのをも知つて居た。かれはいつの間にか深い束縛の出來たのを願ふやうな人であつた。



女の話——其處からかれは女の細かい心持を汲み取つた。女の日毎に送つて居る生活、女と女の両親との關係、幼い頃から今までに至る間の物語、其處からかれは女の總ての氣分と性質とを判断するに十分な材料を得て居た。

女の周圍に居る人々の話や生活や情偽や、さういふものから段々女が詳しく知れてきた。初めは疑惑と不安の間に包まれて居た女の影も、今でははつきりと鮮かに見え出して來た。

時には自分の愛してゐる女を多くの男の中に手放しては置けないやうな氣がしなくてもなかつた。肉體の保護といふことを考へる時は殊にそれが強かつた。しかしそれは以前感じたりやうな女に逢はれない不安とか疑惑とか言ふやうなもの

は全く違つて居た。

「離せるなら離して見ろ」

こんなことをも考へた。

「長い間に築き上げた心、それを一朝にして破られて堪るものか。肉體は？ 肉體は？ それはいくつにもわけることが出来るかも知れないが、肉體に伴つた快樂の度數は到底、わけることの出来ないものではないか」時にはそんな處まで問題を持つて行つた。

割合に落附いた静かな心持で居られることを男は喜んだ。

男はつとめて此方から出懸けて行かないやうな方針を取つて居た。



わざと避けるやうにもして居た。

いつも電話を借りる建物の前をかれは一日おきに通つた。

流石に其處を通る時には心が動かない譯に行かなかつた。大

きな建物からは扉を排して人が出たり入つたりした。肥つた

鬚の生えた紳士が其處から出て来て待たせて置いたゴム輪の

車に乗つて威勢よく出かけて行つたことなどもあつた。

赤斑の可愛い小犬が居た。何處かその近所で飼つて居るら

しかつた。いつも其處等をブラブラして居た。大きな犬の通

るのを遠く離れて吠えて居たりなどした。朝は日の當つた扉

の處に躊躇んで茶色が、つた可愛い眼で此方を見て居た。雨

がその垂れた尾に降つて居る時などもあつた。

男にはこの小犬が何となくなつかしいものゝやうに思はれ

た。かれは其處に來ると、いつもあたりを見廻した。その居

ない時は、何となく佻しい辛い心持がした。丁度女でも居ない

時のやうに。



## 三十二

私此頃加減が悪くつて、あちらでふせつて居たんですけれど、他人の處では、十分保養が出来ませんし、それに不便ですから、五六日こつちの家に歸つて休んで居ますの、お目にかゝりたと思つて居ましたけれど、こんな處には来て下さらないだらうと思つて、今までお手紙も上げないで居たんです。けれど、今日と言ふ今日は、寢て居て、しみじみとお顔が見たくなつて、何だかさむしくつて仕方がありませんから、此の手紙を書きました。来て下さいませねえ。遠方ですけども――

一月一日

より

様

封筒の裏には、かねて聞いて居る女の實家の番地が書いてあつた。夜遅く近所のポストに入れに行つたといふことは鮮かな消印の字で知れた。

遠から来た男が歸つて行つてから、かれは二度ほどいつもの室で女に逢つた。女は『もう遠くに行くのはよしたわ』などと言つて居た。其時にも何處かやつれた元氣のない顔をして居た。

かれはこれまでに女の實家に行つて見たことはなかつた。それはいろ／＼な話を聞いて知つては居た。其處には人の好い父さんとしつかりした母さんともう徐々年頃にならうとす



る可愛い妹が居て、父さんが其妹を生命の次ぎ位に可愛がつて居るといふことなども知つて居た。女はよく其人達の話をして聞かせた。父さんが盆栽道楽で僅かな月給を大方それにつかつて了ふ話などは女から度々聞いて居た。

しかし女から今まで實家に來いなど言はれたことはついでなかつた。

男は不思議な氣がした。普通の家庭に置いて見るその女を、それを男は想像した。それに、今まで全く別な世界に住んで居て、今女と別れて了へば、永久に知らない人で済んで了ふ人達に逢ふのも不思議な氣がした。それに好奇心もあつた。

その日は生憎に忙しかつた。かれが仕事を済して其處へ出

懸けたのはもうかれこれ三時過ぎであつた。秋晴の好い日で、蒼い空が洋館の並んだ賑かな綺麗な町に展げられて居た。アスパルトの敷きつめた人道には、柳の枯葉がパラパラと日を受けて散つて居た。

町の中頃に大きな勸工場がある。やがて其處に入つたかれは西洋雜貨商の肆を見い見い歩いて行つた。女の妹の爲めに土産を買つて行かうと思立つた。かれは二階から下に下りやうとする處の肆の前に足を停めて、幾筋となく其處に長く下げであるリボンを見て居た。小さい畚に結つた愛嬌のある其處の上さんは、やがて傍に寄つて來て、一層幅の廣い流行のリボンの巻いたのを幾箇となく出して客に見せた。



一番幅の廣い色の派手なりポンを買つて、ボール箱の中に入れて貰つて、それをかれは風呂敷に包んだ。

それから町へ出て、見舞の菓子なども買った。

それは遠い處であつた。電車を幾度も乗り替へて行かなければならないやうな處であつた。電車を下りてからは、汚ない暗い町を通つたり、屋敷町のやうなところを通つて行つたりした。ある塀の角に、白い地に黒くその町の名の書いてある札を貼つた時には、かれはもうかなり疲れて居た。

番地を追つて、かれは其處等を行つたり來たりした。庭の松が板塀の外に出て居るやうな處もあつた。細い通りには、建具屋の仕事場があつて、其處では若い職人が二三人せつせと板を

削つて居た。番地はやがてかれを奥深い巷路へと導いて行つた。

その家の前に行つて、かれは暫し立留つた。

格子戸を開けると、鈴がチリチリンと鳴つた。ハイと挨拶した聲は聞馴れた女の聲であつた。

『まア、貴郎』

障子を開けて出て來た女は、吃驚したやうに聲を立て、長火鉢の置いてある居間の方を鳥渡見たが、『よく來て下すつたわねえ。……こんなに早く來て下さるとは思ひもかけなかつた



わ。さア、何うぞ。汚い處よ』

八疊の間には、床が敷いてあつて、友禪の赤い掻卷の襟當が室の中に際立つた派手に見えて居た。六疊の居間には、肥つた品の好い四十格好の女が居た。

やがて静かに立つて來たその女は、座蒲團を男に勧めながら、丁寧に初對面の挨拶をした。

『母さんよ、私の……』

傍から女が引合せた。

『いろ／＼これがお世話になりました、何かからお禮を申してよろしいのか知れません……』やさしい静かなしかし何處かにしつかりした處のある調子で母親は話し出した。

『まア、ねえ、これがさぞ我儘を申すことでせうと思ひまして……』かう言つて間を置いて、『それに、いつも彼方此方と面白い處を見せて頂いたり何かして、それは平生喜んで居るんで御座いますよ』

その言葉は想像して居たよりも柔かく快く男の耳に聞えた。母親が向ふに立つて行つた後で、

『若い母さんだね』

かう男が言ふと、

『だってまだそんなに年を取つて居ないんですもの、四十よ、まだ』かう言ひかけて女は笑つて、『私にすこしも似てないでせう？』



「さうだねえ、さう言はれれば似てないね」

「私父さん似ですもの」

すぐ話頭を改めて、

「今も貴郎のこと考へて居たのよ……手紙が今朝著いて、明日は来て下さるだらうと思つて居たわ」

何處となく窶れの見える女は、銘仙の袷に黒縞子の帯をひっかけに結んで居たが、鳥渡引つかけた黒縮緬の羽織は、一層その顔を青白く病人らしく見せた。

それでも襟は派手なのをかけて居た。

「そんなに起きて居て好いのかえ？」

「今まで臥て居たんですけれど、餘り氣がクサク／＼するから起

きて母さんと話でもしようとして居た處よ。」髪に觸つて見て「こんなに壞れて了つて、本當に氣持がわるい。いつそ解かうかしら？」

さも煩ささうに垂れて来る鬢の毛を指でかき上げた。

枕元はすぐ縁側になつてゐて、其處には菊の見事に咲いた大きな鉢が置いてあつた。床の傍には、厚い本が讀みかけたまゝになつて伏せてあつた。

男はそれを翻して見た。「己が罪」としてあつた。

「今時分こんな本を讀んでゐるの？」

「いゝえ、前にも讀んだことがあるんですけど……家にあつたからまた讀んで見たのよ。可哀さうね、矢張……」



男は笑つて居た。室にある箆筒だの机だの、額だのが段々男の眼に入つて来た。厠の方の縁側には、まだ夕日が微かにさし残つて居た。其處には楓や柘榴や樺や松などの盆栽が一杯に並べられてあつた。

暫く経つた後には、親しみ易い氣の置けないやうな空氣の中に男は居た。「まアお宜しいでせう、別にお構ひも出来ませんから、此方に入らつしやいまし」かういふ風に母親からも女からも言はれて、無理に居間の長火鉢の側に連れて行かれた。綺麗に艶の出た鐵瓶や五徳や火箸や藥罐などの置いてある

その側で、女は母親を扶けて、炭を繼いだり水をさしたりした。茶箆筒の上には、小さな水天宮のお宮が祀つてあつて、その傍には茶道具がゴタゴタ置いてあつた。それを女は白い腕を伸して取つた。

家庭で見る女の態度は、慙くとも男にはめづらしかつた。口の利きやうにも甘へるやうな處がなく、わざとらしい處がなく、總べてが隠すところなく顯れて居た。母親の前では、矢張普通の娘に過ぎなかつた。我儘な打解けた調子で、睦しさに母親と話して居るのが男の耳には殊に快く聞き取られた。「昨夜は床の中で遅くまで母さんと二人目を覺して居て、いろんな話をしてよ。私の生れた



時の話なんか出たんですもの……もう遅いからお寝よって母さんが言つても聞かないで、私が起して居たわねえ」こんなことを女は言つて笑つた。

まだ茶も淹れない中に、役所から父親は歸つて来た。話をするにも顔を赤くするやうな人で、成ほど老舗の若旦那であつたらしい面影が、まだ其處等に殘つて居た。娘に對する言葉にも、絶えず他人に物を言つてゐるやうなやさしい處がある。やがて立上つて、「ぢや私は御免を蒙つてお湯に行つて來ますから」かう言つて出懸けやうとするのを母親は追ひかけて行つて、何か御馳走の註文を頼んだ。

『それから父さん、あそこに行つて鰻を頼んで來て下さいよ』

娘からかう言はれて、

『よし、よし、すぐ持つて來るやうに言つて來る』

せかせかとして出かけて行つた。

妹といふのは、姉に比べては、丸で別な子かと思はれるやうな少女であつた。黙つて上り端から入つて來て、ソツト座敷の方へと行つた。纏て袴を脱ぐ氣勢がした。母親が立つて行つて、何か二言三言小聲で話をしてゐたが、容易に此方に顔を出さうともしなかつた。母親との低い話聲は、暫の間障子のかげで聞えてゐた。

『何してるの？ 此方にお出な、好いお土産を戴いてよ。それは、本當にお前さんの大好きなものよ』



かう言はれて、顔を赧くして出て来たのは、十四位の背の大きい可愛い少女であつた。髪をお下げにして白いリボンをかけて居た。

丁寧にお辭義をした。

「はら、御覽、こんな好いのよ」姉は其處にあつたボール箱の蓋を明けて見せて、

「お禮を仰しやらないと、上ませんよ」

「何うも有難う」

また丁寧にお辭義をした。

若い娘には、何よりもかうしたものがうれしいといふやうに見えた。室の隅の方に小さくなつて坐つて、頻りにその箱をわ

けては見て居た。「好いでせう、氣に入つたでせう。やたらにか  
けちや駄目よ」かう言つて姉はまたそれを手に取つて見て、「色  
氣が好いわねえ。お前には丁度好い」

母親が傍にあつた菓子を取つてやると、

「此子は學校から歸つて來ると、まだおやつをねだるのよ、貴郎」  
女はこんなことを傍から言つた。妹は顔を赧くして立つて  
行つた。

茶湯臺には種々なものが載せられた。

「此處等には何うせお口に會ふやうなものは御座いませんか



ら」母親は煙の出来た徳利を銅壺から抜いた。

誰も酒の相手をするやうなものはない。『私はお酒の匂ひを嗅いだいけでも酔つて了ふんですよ』かう母親は眉を寄せて言つた。湯から歸つて来た父親は、煙草盆を前に置いて、香を丸くして、頻りに煙草をふかして居た。

『父さんも、そりやお酒は駄目な方よ。……甘い方には眼のな  
い方だけど……。父さん、これ上げませうか』娘は笑ひながら、傍にあつた唐饅頭の菓子鉢を父親の方に押遣つた。父親は莞爾して居た。

遠い昔の話が出た。女の稚い時の話などを母親は飽きずには話した。『父さん、寫真を出して御覽なさいよ』

寫真の箱の中には、女が赤坊の時のだの、五歳位のだの、十二三位の時だの、寫真が幾枚もあつた。母親が派手なつくりをして、父親と一緒に女を中にして寫したものは、中でも殊にはつきりして居た。『それは大阪で撮つたのよ。其時分家では大阪に行つて居たのよ。私、七歳の時だわねえ』かう言つてその寫真を手に取つて見て、『母さんも若つたわねえ。二十七八ね………恁麼時代もあつたんだねえ』

『若かつた時は、これでもお綺麗だつたとサ』  
母親はこんなことを言つて笑つた。

其他にも男の寫真だの、女の寫真だのが澤山にあつた。『はら、これよ』女は其處から一枚の寫真をさがし出して男に見せた。



それは女が田舎で圍れて居た若旦那の寫真であつた。五つ紋の羽織を着て袴を穿いて居た。

「これは、貴郎は知つてゐるわねえ」

女は猶ほ笑ひながら、ハイカラな洋服姿の眼のぎよろりとした別の寫真を出して見せた。

それは一時女が大騒をした男であつた。

男は笑つて居た。

かうして居る中に、男は段々酔つて來た。壁にかけてある三味線を女はやがて取つて、鬱金の袋を外して、コマをはめた。「母さんの常磐津は古いのね。今とは餘程違つて居るところがあるわ」こんなことを言ひながら、此頃習つて居る「辰橋」を弾き出

した。

前の小窓にはまだ簾が掛けてあつて、一枚明いた障子からは、通を隔て、向ふの家の裁込が見えてゐた。豆腐屋が鈴を鳴して通つて行つた。

一時間ほど経つた後には、男は酔つて其處にござりと横になつて居た。「貴郎、少し寝て行く方が好いわ。酔つたの？ 此頃は弱くなつたわねえ。いくらも召上りもしないのに……さうなさいよ、ね？」かう言つて女は搔卷を持って來てかけて呉れた。男が眼を覺した時には、もう全く日が暮れて、ランプが點いて居た。女は其傍で頻りに本を讀んで居た。「目が覺めて？ おひやを上げませうか」かう言つて女はすく立つて行つた。



座敷の方にも洋燈がついて居て、妹は頻りに明日の學科の復習をして居た。父親は近所に行つて居なかつた。

其處から電車の停留場に行く路は、半は屋敷町で、半はカンテラなどの明るい場末の町になつて居た。病中だから好いと言ふのを聞かずに、女は男を送つて出かけて來た。

「話すことがあるのよ」

わざとはしやいだ調子で女は言つた。

霧の深い夜で、四邊は静かであつた。薄白い夜の色の中を時々人が影のやうに擦れ違つて通つて行つた。大きな邸の門の

が、大燈の前を通りかゝらうとした時、女は不意に、

「貴郎、私とら〜變な體になつて了つたのよ」

男は耳を敏くせずには居られなかつた。

「先月あたりから、變だ、變だと思つてましたけどもまさかと思つてねえ。處が矢張さうなのよ」

「うそだらう」

「本當よ」

女の聲は眞面目に聞えた。

二人は黙つて歩いた。

暫くしてから男は、「本當にかえ？」

「え」



「それはお目出度いぢやないか」

「あんなことを言つて」二足三足歩いて、

「まだ母さんには本統に話してはないのよ。けども好いわねえ出来たッて。」

「それは好いさ」

男はかう言ふより他に仕方がなかつた。

二人はまだ黙つて歩いた。霧は處々の灯を掠ては白く流れた。ポウと音を立て遠い處を通つて行く電車の音が聞えた。

「私母さんに相談して見てよ。……何うせ彼處では何うすることも出来ないわねえ。近所にも具合がわるいし……それに變だわ。それから私向ふの方にも知らせたくないのよ。何の

彼のッて人に言はれるのは厭ですからねえ。……でもまだ一月やそこらは好いけどもさういつまでも構んでも置けないわ。」かう言つて男の手を闇に握つて、「私考へて置いたことがあるのよ。私の遠い親類が田舎に在るから其處に行かうと思つて居るのよ。海の傍よ。そしてそんなに遠くないのよ。漁師で家が廣いから喜んで世話して呉れるわ。……」

場末の電車の停留場には誰も待つてゐるものもなかつた。電燈が霧に濡れて繪のやうにかゝやいて居た。驛員が停留場の中で珠算を弾いてゐるのが硝子戸を透してはつきりと見え

た。二人は踏切を越えて向ふに行つた。



「もう好いよ、」

「でも、電車の来るまで」

女の顔は電燈の光を受けて、殊に際立つて白くくつきりとして居た。

電車が来て、やがて男は乗つた。踏切を電車が通る時にも、女はまだ其處に立つて居た。

不思議にも男の心には、優しい思ひが充ちて居た。誰の子だかわかりやしない。さうした疑惑は無論起らないではなかつたが、しかしそれよりも女が心を打明けて、縋つて来たといふことの方が、かれに取つては大きな事實であつた。虚偽でも何でも好い、自分の子でなくても何でも好い女がさういふ體の狀態

に居るといふことが男にはめづらしかつた。

かれは明るい心を抱いて、明るい電車の中に居た。



## 三十三

女から母親と相談した結果を知らせた手紙も来た。男の方からも出かけて行つて、いつもの處で逢つて細かい話などもした。女の體は確かに鬱調を來して居た。女は本當のことを知らせた。

『かういふ稼業をしてるのですから、さう思はれても無理には思はないわ。……けども、もし生れて貴郎に似てたら、何うして？』女はいつもに似合はない静かな調子で言つて、『だから、かうした稼業をして居るものに出來た子は本當に可哀相よ。私など随分いろいなることを聞いて知つて居るわ』

産れ落ちるとから里子に遣つて、一月も経ない中に知らぬ顔をしてお座敷に出たといふ人もある。見も知らない他人にお金をつけて遣つて了つた人もある。その爲めに幸福になつたものもないではないが、それは極く稀だ。かう女は話して聞かせた。さる名のある老妓は、若い頃に出來た其兒に別れるのが辛くつて、田舎の里親にキチンキチンと里扶持を遣つて、其兒が十三四になるまでも、一月に二三次は屹度行つて見るのを樂みにしてゐた。それに大きくなつてからが可哀相だ。本當の父親でもさうでないやうな氣がすると見えて、何處か情愛に違つた處がある。猶盡きずに女はさうしたことを話して、『でも、私は幸福よ。貴郎はそんな薄情ぢやないから』かう言つて、男の



顔をじつと見た。

「そんなことはないわ。女でなくつては、誰の兒だか、本當のこととは解らないなんて、そんなことはないわ。生れて見りや、ちやんと解るわ」

女はかう重ねて言つた。

眼の縁には暗い影がそれとなく見えて居た。白粉をつけて居るので、鳥渡見ては解らないが、顔の色ツヤも何處となく荒んで居た。態度にも衰へたやうなところがあつた。

「まだわるいの？」

女中からかう聞かれて、何の彼のとまぎらして居る女のさまが殊に男にはいぢらしく見えた。虚偽をのみ期待してゐる女

から始めて眞實を見たといふやうな心持がした。男は今更にじつと女を凝視めるやうな人であつた。

捉へることの出来ない、縛ることの出来ない、何んな細かい網の目の中からでもいつかつると抜けて逃げて行つて了ふやうな女の心——それを包んだ女の體に、熱い力強い男の心がいつか微妙に働いて、かういふ状態を眼の前に見せてゐるといふことは、男には殊に意味深く感じられた其處に男は男の勝利を見た。



## 三十四

低く孕んだ帆が海へと出て行つた。濁つた大きな川の岸には、船が幾艘となくかゝつて居て、大漁の模様の出た襦袢を着た漁師や、髪を無造作に束ねて大きな聲で子供を叱つて居る上さんや、日向で網の破目を繕つて居る男や、粗朶の垣や、貝殻の屋根や、さうしたゴタ／＼したものゝ上に、此頃ではめづらしい暖かい冬の日が一面に静かにさし渡つて居た。

長閑な日だ。

其處の岸から汚い漁師町がすぐ開けて見られた。庇の傾いた古い小さい家屋が兩側に並んで、かうした處に特有な一種腥

い氣がそれとなく四邊に充ち渡つて居た。貝殻を載せた屋根がそれからそれへと續いた。

井戸の傍で洗濯をして居る上さん、白い手拭をかぶつてせつせと働いて居る頬の紅い娘、縁側に出て日和ぼつこをして居る汚ない婆さん、町の通には頭に大きな臺を載せたヨカ／＼あめ屋が、太鼓を叩いて賑かな聲を立て、通つて行つた。町の中頃にある大きな家の前の吹井からは、綺麗な水が絶えず溢れ出して居た。

この漁師町の裏には、なにかし町からなにかし町に通ふ電車が通じて居て、其處の停留場は、町の中頃から細い路を抜けて、麥畑や大根畑などの青々とした間を通つて、それから猶少し行つ



たやうな處にあつた。電線の唸る響がをり／＼聞えて、ポーと鳴る音と共に、赤く白く塗つた電車は、常に威勢よく田圃の中を通つて行つた。

その電車に乗つて、母親に送られて、女が此處に遣つて來たのは、矢張り暖かい冬の日の夕暮であつた。停留場の人達は、縮緬の七分コートを著た此處等では餘り見懸けたことのない綺麗な丸鬘の女を物めづらしさうに見た。兼ねて話をしてあつた其處の親類の家では、新しい珍客をよるこんで迎へて豫め綺麗に掃除して置いた奥の離れの二階へとすぐ案内して行つた。此處の上さんは女の母親の従妹で、「まア、いゝお上さんになんなすつたな、小さい時分にはよく遊びに來たことがある

が、覺えて居さつしやるかな」などと、女の丸鬘を見い／＼言つた。

二階は六疊で、窓の外には狭い小さい欄干が出張るやうになつてついて居た。其處には萬年青の鉢などが置いてあつた。

海は其處から手に取るやうに見えて、潮のさして來る時には、すぐ下の石垣まで波は押し寄せて來て靜かな音を立てた。

天井の低い、壁の煤けた古い錦書の貼つてある室で、女はやがて日を送ることゝなつた。退屈すると、女は母屋に出かけて行つて、上さんを相手に、都會の賑かな話や、面白い芝居の話などをして聞かせた。時には七歳になる可愛い口の利き方をする女の兒の髪を結つてやつたりした。



夕暮など、裏の石垣の上の門の處に白い顔をくつきりと見せて、さびしさうに一人て海を見て居ることなどもあつた。

派手な女の姿は到る處に鮮やかな色彩を際立たせた。家の女の兒達は、東京のをばさんを珍らしがつて、何ぞと謂つては、その後、に跟いて行つた。町でもいろいろな噂をした。「藝者だよ、何うもさうだと思つた」などと上さん達は言つた。

太く根を張つた樺の樹のある社の境内に女の兒と伴立つて來て居ることもあつた。濁つた汚い小川に沿つた道を、夕日に照されながら、靜かに歩いて行くこともあつた。暗い動かない

水に夕焼の空が微かに映つて居るのを橋の上に立つて凝と見て居ることなどもあつた。風の吹く日は、海は藍を溶かしたやうに碧かつた。女は窓を明けて波頭の白く立つのを見て暮した。

その二階の間からは、石燈籠だの松だの、ある落葉の積つた中庭が見下された。そのすぐ傍が風呂場になつて居た。女が來てから、毎日風呂を立て、呉れるので、午後には、細い煙突からいつも黄い白い煙がほそくと颯つた。四時頃になると、女の兒はさまつて、「をばさん、お湯が沸いたよ」と知らせに來た。母屋の方には、漁師達が絶えず出たり入つたりした。肥つた老いた此家の主人は、いつも莞爾して居るといふやうな人で、夜



は大きい舊式のランプの下で、若い漁師達を相手に、面白さうに海の話などをした。上さんは多い子供達の世話に忙がしく、末の兒に大きい乳房をふくませながら、近所の上さん達に何彼と應對して居た。竈の下には、火が赤く闇を隈取つて見えた。

何うかすると女は遅くまでその群に交つて話をして居るとなどもあつた。と、其處に上さんは末の兒を寝つかせて遣つて来て、『一つ弾いて聞かせてお呉れや』などと言つて、自分が娘であつた頃の古い三味線を取り出したりした。女は笑ひながら、流行唄などを弾いて聞かせると、『今は、東京では、そんな唄が流行るかや』かう言つて上さんは面白さうにして聞いて居た。女の兒達はその周圍に圈をなして集つて居た。

平野の果ての山々にはもう雪が来て居た。海の注ぐ大きな川の土手の上からは、それが朝日夕日にかいやすわたるのが見えた。幾艘ともなく岸に繋つて居る苦を葺いた船の上には、朝霜が白く置いた。

海には粗朶の林が幾列にも並んで、潮がさして来ると、それが女の髪か何ぞのやうに水に漂つて見えた。黎明の中から海苔を取りに行く船の出で行く賑かな氣勢は、女の室まで手に取るやうに聞えて来た。

引潮の時には、裏の出口から、海岸づたひに漁師の家並の裏の方へ出て行かれるやうになつて居た。退屈すると女は獨りでよく其處に出かけて行つた。



暖い日などには、海苔の一面に干してあるところに立つて、其處の上さんと話をして居ることなどもあつた。女は正月に嗜んで食ふ海苔が、かうして出来るのを珍らしいことに思つて、上さんからいろいろなことを聞いた。漣いた紙のやうに其處等に立懸けられた海苔には、薄い冬の日が當つて居た。

その途中のある家の垣の外には、紅白の絞の山茶花が綺麗に咲いて居た。ある日女はそれを折つて来て、藍の模様鮮やかに出てゐる一輪ざしにさして、海に向いた方の窓のところに置いた。

男が其處に遣つて来たのは、女が来てから五日ほど経つた後であつた。矢張暖かい春のやうな日であつた。島の畔には、黄菊白菊が霜にやつれながらまだ残つて居て、風が静かに落葉をころがして吹いて行つた。

縞羅紗のインパネスを着て、鼠色の中折の帽子を冠つた男の姿は、電車の停留場からその島の間の細い路を通つて町の通の方へと出て行つた。角の駄菓子屋で聞き通に遊んで居る子供に聞いて、漸くそれと解つた家には、上さんが子供を抱いてぼつねんと入口のところ立つて居た。男は静かに其處に入つて行つた。上さんはそれと聞いて、すぐ點頭いて、其處に居た女の兒に言つた。